
『**ダーク・ロード** **黄昏に抗う者**』

S・HUNTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ダーク・ロード』

黄昏に抗う者』

【Nコード】

N2947Z

【作者名】

S・HUNTER

【あらすじ】

桐生貴夜は生まれ持つての外観と学年トップの成績、そして反抗的な態度によって一部の不良生徒から虐待を受けていた。彼は暴力的な行動を嫌い、親友である神代顕人にも、自分の為に暴力で持つて復讐するのを止めているほどであった。

無残な死体を残し、街を恐怖に陥れている連続殺人事件が続いていたある夜、貴夜はその犯人と思しき黒衣の大男とであった。その男は『オーガ』と呼ばれている『闇の種族』^{ダーク・レイズ}で、男は潜在的に強力なパワーを持つ貴夜の魂に惹かれ、貴夜を手に入れようと考える。

黒衣の男　闇に堕ちる以前は、かつては『闇の種族』と敵対していた『聖戦士』だった　が貴夜に襲い掛かる寸前、それを阻止した少女の名はリーゼロッテ。『闇の種族』の中でも『主』^{ローテ}と言う上級のカテゴリーに属する、青と紫の瞳を持つ小柄な美しい少女だった。しかも古代の魔術を駆使する『護法魔導師』と言う魔術師でもあるのだ。

『オーガ』を撃退した後、リーゼロッテは貴夜自身が『主』^{ローテ}としての種であることを告げ、『オーガ』の手から守ることを約束した。貴夜を『主』^{ローテ}として覚醒させる儀式を執り行っていた時、『教会』の『聖戦士』がリーゼロッテを襲撃した。本来は『オーガ』を始末する為に派遣された『異端処理官』ヴィートーリオは、偶然に見つけた『七主』であるリーゼロッテに功名心を刺激されたのだ。

プロローグ

どこの国でもそうなのだろうが、この国の国際空港のロビーも酷く混雑していた。

雑多な肌と髪の色の様々な人種が、極東のこの国のどこよりも多くそこには集まっているが、その少女はその中でも一際目立つ存在だった。

特に大きな体格ではない。いや、どちらかと言えば小柄で華奢な体つきの愛らしい少女だ。淡い浅葱色のワンピースがさらに愛らしさを醸し出している。

年の頃は十五、六であろうか？ 人形のように整ったその顔はどこかつまらなそうな表情で、ロビーのソファに座ったまま行き交う人々を眺めていた。自分が人の目を集めていることに気づいてもない。

細い金糸を集めたような、白い輝きを放つ腰までの長いプラチナ・ブロンドは、淡い水色のリボンが飾られ、北欧人のようなミルク色とは趣の違う、蒼白いほどの白い肌に相まって、どこか作り物じみた外見を強調している。

しかも天上の名匠による奇跡の造型だ。人間の手にはこれほどの美しさを顕わすことなど、きつとできはしないだろう。

少女が人工的な印象を与えるのは、きつとその瞳の色にも理由があるであろう。

左右の色がはっきりと違うそれは、オッド・アイとか金銀妖瞳とか呼ばれているものだ。地方によってはいまだに魔女の印、邪悪の象徴ともされている。

右目は夜明けの空のような青。左目は黄昏に近い空の赤味を帯びた紫色。

どこか幻想的な美しさを見る者に印象づけるその瞳こそが、少女の存在そのものを顕わしているようだった。幽玄の、どこか生身の

人間とは思えないようなその印象のすべてを……。

少女の傍らには、さらに幼い少女が座っていた。

十歳に満たないであろうこれもまた愛らしい少女だった。藍色に近い黒髪を背中まで伸ばし、大きな赤いリボンを飾っている。その大きな瞳は青空を氷で閉じ込めたような鮮やかな水色をしているが、どこか表情に乏しい落ち着いた雰囲気を醸し出している。

二人の美少女は、自分たちに向けられている視線をまるで感じる様子もなく、どこか超然としてソファに座っていた。周りの一切を存在しないものと振舞っているかのようにも感じられる。

「本当にゴミゴミした所ね。それに空気も良くないわ」

金髪の少女はつまらなそうな声で呟いた。桜色の唇がすこし突き出ている。

先ほどまでの作り物じみた印象が、そこでがらりと変わってしまうような表情と口調だった。つんとしたその顔は急に生氣を感じさせる。

「時代が変わってしまったのですから仕方がないでしょう」

黒髪の少女はその外見からは想像も出来ないような大人びた、そして無感情な口調で金髪の少女に答えた。

「それにあなたの意思でこの島にやって来たのですよ、ミレディ」

旧い言葉で黒髪の少女は金髪の少女を『ご主人様』^{マイン・レディ}と呼んだ。この二人は主従関係にあるのだ。

「そうね。でも正直言えば、なぜこの国にあの方がやって来たのかわたしには理解できないわ。それに……」

「あの方がなんの為にこの国へやって来たのかなど、ミレディには関係ないと思いますが。どちらにしろ、ミレディはあの方を」

「わかっているわよ。でもね、やはりわたしはあの方を見つけることができないかも知れない。見つけてもわたしには……」

少女の声は、最後の方は呟きになって消えた。その色の違う瞳に、わずかに暗い影がよぎった。

「それもミレディの意思で決定するのなら問題はありません」

黒髪の少女の声は無機質だった。だが金髪の年上の少女は、わずかな笑みを浮かべてビロードのような黒髪を撫でた。

「いつまでもこんな所に居てもしょうがないわね。一休みして体調も元に戻ったことだし、そろそろ行きましょー」

金髪の少女はしなやかに立ち上がり、小さな鞆一つを手に提げて、出口に向かって歩き出した。その後ろを黒髪の少女が追う。どこか辺りを探るように、その小さな頭を左右に振りながら……。

始まりの夜

1

下弦の月が美しい夜だった。だが霧生貴夜きりゆうたかやはそんな幻想的な美しさを持つ夜空にも、その目を向ける気分にはなかった。それどころか苛立ちと怒り、そして謂われのない劣等感に苛まれ、俯くように地面を見ながら彷徨うだけだった。

それに、どうせ月よりも派手で毒々しいネオンサインの光が、あちこちに光り輝いているこの道では、情緒豊かにそれを眺めることなどできやしないのだ。

貴夜は中肉中背の目立たぬ少年だった。だがどこか鋭利な印象の面立ちと切れ長の目、そしてすつきりと通った鼻筋とやや薄いが形の良い唇の、よく見れば非常に整った容貌の持ち主である。

だが陰鬱な表情で俯き、背中を丸めるとぼとぼと歩く今の貴夜の姿は、あまりにも陰気臭く近寄り辛い雰囲気を漂わせていた。それに全身が土埃に汚れ、無数のほころびと鉤裂きに飾られた制服姿は、誰もが係わり合いになるのを恐れる風体であった。

貴夜は不良集団による苛めを受けていた。いや、それは苛めと言うより暴力であり虐待と言えるものだった。顔や露出している素肌には傷跡や痣など見えないが、制服の下には無数の青痣が残っている。

ただ貴夜はそれに対し諾々と受け入れているわけではない。どちらかと言えば反抗的な態度を示す少年だった。だからこそ、その暴力がさらに酷くなってきたのは、貴夜にも重々承知の事であった。

貴夜はプライドが高すぎる少年だった。いや、それだけではない。

常にトップレベルの成績を持ちながらも、彼には少々賢さが足りないのかも知れない。要領よく立ち回る術を知らないのだ。

もちろん、貴夜には虐待を避ける為の方策はいくらでも考えついただろう。彼らが望むような従順な態度を取り、卑屈な学校生活を送るのは問題外にしても、教師に虐待の事実を告げてよいし、いざとなれば暴力事件として警察に駆け込めばよい。

だが貴夜はそんな考えに及ぶような少年ではなかった。それはなにかに負けてしまうような気がしているからだ。

結局はプライドだけが高すぎて、他人に頼ることもできないと言う性格だと言うだけなのだろう。

ただそんな貴夜には、虐待の首謀者達を死ぬほど憎悪し、復讐したいとか、殺してやりたいとか、そう言った暗い感情はなかった。それにあてつけのように自ら死を選ぶような考えもない。ただ暴力やそれに類するものが嫌いなだけなのだ。

別に強い信念があるわけでもない。ただ貴夜がそのような性質だと言うだけだ。

とは言え、このまま黙っていてもなんの解決にもならないのは承知の事実だった。

無抵抗でいれば、いつかは相手も厭きるだろうなどと言う、そんな考えはすでに意味のない、貴夜の独りよがりな甘い考えであると思いが知らされたのだ。

それは今日の午後の出来事であった。

いつもの如く下らない理由で因縁をつけられた貴夜は、いままでにない暴力に曝されてしまったのだ。

彼らと同様の暴力で反抗することもなく、許しを請うこともしない貴夜は、つい三十分ほど前までサンドバックのように扱われていたのだ。

どう考えても一人でいる時を狙われたのだろう。

普段は親友の神代^{かみしろ}顕人^{あきと}と共に下校する貴夜であったが、今日は偶々顕人が早退していた。そして彼らはそれを知って計画的に貴夜を

待ち伏せていたのだ。

彼ら 貴夜を目の仇にする虐待グループは、以前顕人に手痛い報復を受けていた。

格闘技経験があるらしい顕人は、並みの不良よりも遙かに強かった。自分は掠り傷一つ負わず、五、六人ほどのグループ全員を簡単にのしてしまっただのだ。

親友の貴夜を守る為に行なった行為だったが、貴夜自身はそれを批難してしまった。

暴力で暴力に対抗しては、所詮彼らと変わらないのではないかと。

もちろん、顕人の行為が嬉しくなかったわけではない。その理由も痛いほどわかっている。なんとと言っても、顕人は貴夜に取って唯一と呼べる親友なのだから……。

だが自分の信念として、貴夜はもう二度とそう言うことはしないで欲しいと顕人に告げたのだ。実際はそれほど強い信念などないのだが……。

顕人は酷く不服そうだった。そして呆れたようにこう言った。

（この世界にはおまえが思うほど、まともな人間ばかりじゃないんだぜ。おまえが引いても、それ以上に踏み込んで来る奴は大勢いるんだ。やられてもやり返さない人間を、さらに追い込んでくる卑劣で下劣な奴がな）

顕人の言葉はある意味真実を突いていただろう。だが、貴夜はそれでも信じるつもりであった。人間の本性は善であると。

不承不承であったが、顕人は貴夜の言葉に従った。

しかし全身に燃えるような痛み覚えるいまとなつては、貴夜の考えがいかに甘いものだったか考えさせられる。

自分のことも守れない人間は、信念を声高に叫ぶこともできない。しよせん負け犬の遠吠えと変わらない、そう言った現実を……。

もつとも、本当に自分を情けなく思っているのは、ポケットに忍ばせている冷たい金属の感触の所為であった。

それは父が残した形見であった。

古いデザインの、まるで中世の騎士が持つような幅広の剣を模した短剣だった。だが実用には覚束ないほどの小さな、ミニチュアの模型のような……。

武器として持っているのではない。

ただの御守りだ。

だが小さいとは言えその鋭い刃は、充分に人を傷つけることのできる凶器にも変わるのだ……。

貴夜の家までは後五分も歩けば辿り着くはずだ。もし身体を痛めつけられていなければ、駅の駐輪所に止めてあった自転車に跨り、今頃はすでに辿り着いていてもおかしくはなかったのだが……。

足を引き摺るように、重い身体を苦勞して動かしているので、普通に歩くよりもさらに時間が掛かってもいる。

ここまで来ると、繁華街から大きく外れているので、人通りもほとんどなくなっていた。その代わり、酷く寂しい暗い道が続くことにもなる。

普段は別段、そのようなことに不安を覚える貴夜ではなかったが、ここ最近の物騒な事件の所為もあり、すこしばかり神経質になっていた。どうもこの街には連続殺人鬼が通り魔の如く徘徊しているらしいのだ。

奇妙で恐るべき事件が起き始めたのは二ヶ月ほど前のことである。この街を含めた地域で、全身から血を抜かれ、手足をもぎ取られ、

内臓がポツカリとなくなつてしまつた遺体が複数発見された。まるで猛獣に襲われたような無残な遺体の為か、それが人間の仕業だとは思えないと言われていた。とは言え、それほどの惨状を造り出すような猛獣の痕跡は、一切発見されていない。

あたり前だろうと貴夜は思う。

なんと言つても殺人現場は市街地なのだ。しかも、歓楽街や繁華街の路地裏と言う場所が主だった現場であり、けつして山奥の話ではないのだ。それで人を食い殺す獣が目撃されないわけではない。それに、そんな猛獣がどこからやつて来ると言うのだろう。

犠牲者の数はすでに十二人にも上つている。だがいまだにその犯行を目撃した人間はなく、決定的な物証も見つかつてはいないらしい。

巷ではこの不可解でおぞましい事件のことを、まるでホラー映画に出てくるような化け物の事件と捕らえる者もいる。

笑い話ではない。

まるで昔話にある『鬼』が徘徊しているかのような、扇情的な見出しをつける雑誌記事まで書かれているのだ。

もちろん、貴夜はそんな記事を鵜呑みにするタイプの人間ではない。

普段なら笑い飛ばしてしまうだろう。いや、正直つてそんな記事は一片も信じていない。『鬼』なんてものは信じようがないだろう。

だが。

人が殺されているのは事実だ。どのように無残な殺され方であろうと、それが人間の業とは思えないようなものであると、夜の街中で何人も人が死んでいるのは変えようのない現実なのだ。

普段の貴夜ならそこまで不安に駆られることはなかっただろう。だが全身に打ち身を負い、体の自由が利かないいま、そこはかたない不安を覚えても仕方がないのだろう。なにかあった時、頼れるのは己の身体能力だけなのだから……。

自宅まではあとわずかだった。この道の先を進み、二つ目の角を曲がる。するとそこに、いまは十数件しか居住している者のない小さな住宅地が存在する。

その角地にある大きな一軒家が貴夜の住居だった。寂れた雑居ビルが立ち並ぶこの一角は、特に人通りがなかった。二本ほど通りを渡れば、メインストリートにぶつかるのだが、この辺りはすでに開発の波から外れてしまった地域だった。古ぼけたビルの間や細く暗い路地があちこちに存在しているので、余計に想像をかき立てられるシユチュエーションでもあった。

だからだろうか。

貴夜の耳に、獣の如き低い唸り声が聞こえたのは。思わず足を止め、頼りない外灯の薄ぼんやりとした灯かりを頼りに、辺りの闇の奥を窺った。だがそれ以上、特に妖しい物音も聞えず、不審な人影も見当らない。

(気のせいだよな?)

ホツとしたように息を吐くと、貴夜は肩に掛けたシヨルダーバッグの位置を直し、再び足を踏み出した。

その途端、逝く手を遮るようにして、黒く大きな影が目の前に現れた。

呆然として貴夜はそれを凝視した。闇の中に、紅い二つの輝きが浮かんでいる。

「おかしい。確かにあの方の波動を感じたのだが……」

低い、そして擦れたような声で、紅い眼の持ち主は呟いた。日本語ではあるが、どこかイントネーションがおかしい。

闇の中からそれはゆっくりと身を顕わした。

全身を黒いマントのようなもので覆い、貴夜の目線よりかなり高い位置にあるその顔だけが露出している。身長は二メートルに近い大男だった。

街灯の弱々しい光に照らされた男は、短く刈った赤茶けた髪をして、そして尊大な鷲鼻と爛々と光る紅い眼を持っている。四角張った顎にも短い髭が生えていた。

日本人ではない。その詳しい人種まではわからないが、きっと欧米人であろう。

「な、なんですか？」

紅い眼に射竦められながらも、その異様な風体の男に向かい、貴夜は問いかけた。

「貴様 何者だ？ 『闇の種族』とは思えないが、貴様からは同族の、しかも『闇の主』^{ダーク・ロード}の持つ波動を感じる。しかもあの方に極めて近い波動を」

男の声は陰々とした声で男は、貴夜の問いにさらに問い返す。背筋にぞくぞくとしたものが走った。その風体と言い、意味のわからないその言葉といい、どう考えてもこの男は普通じゃない。

「何者って 『闇の主』^{ダーク・ロード}？ なんですかそれ？ ぼくはただの

「
そう答えながら貴夜は、目立たぬようにゆっくりと後退りした。
すこしずつ距離を置き、一目散に逃げ出そうと考えていた。」

（どう見てもコイツはヤバイ！　もしかしたらコイツが通り魔なのかも……？）

そんな貴夜の考えを知ってか知らずか、その大男は半眼になつてなにか考え込んでいた。紅い眼で貴夜を見据えているように見えるのだが、特別にアクションを起こす気配を見せていない。

「ふん。やはりまだ人間であることは間違いないようだな。覚醒する以前と言うことか。だが、『闇の主』^{ダイク・ロード}の力を秘めている稀な存在だ」

男はそう言って幽かな笑みを浮かべた。その笑みは尊大で、真紅の瞳には無慈悲で邪悪な輝きを宿しているように見えた。

「少年よ。貴様は今宵の獲物に相応しい。我が血肉となり、魂を分けあう栄誉を貴様に与えよう」

男は大きく唇を歪めた。するとその歯が剥き出しになり、通常の人間にはあり得ないほど発達した犬歯が剥き出しになった。

貴夜は瞬時に判断し、肩に掛けたバッグを思い切り投げつけた。そして男に背を向けて一気に走り出す。

足が痛いとか疲れているとかは言っていられなかった。それほどにあの男からは恐怖を感じていた。身の危険を心の底から覚えたのだ。

通りから引つ込んだ路地に飛び込み、さらにその奥に向かって走る。ビルとビルの間にあるこの道を通り抜ければ、大通りに出て行け

るはずだ。そこなら人通りも多くなるから、あの男もそこまでは追いかけて来ないだろう。

そう思っていた。だがすぐに、希望は絶望に変わってしまった。

道を一本間違えたことに気づいたのは、そこに壁のようにそそり立つ、コンクリートブロックとその上の金網を見たからだだった。

行き止まりだった。袋小路だった。

背後になにかの気配を感じた。微かだがアスファルトの上を歩く音がする。

(アイツなのか？ アイツが追って来たのか？)

貴夜は背中に冷たい汗が吹き出すのを感じた。振り向き、それを確認するのが恐ろしかったが、それでも貴夜は慌てて振り返った。

予想は外れた。振り返った先には、あの不気味な大男は見えなかった。

蒼白い幽かな月の光の下、そこには一人の少女が所在なげに立っていた。どこか落胆したような表情でこちらを見ている。

貴夜は声を失ってしまった。ただ呆然と少女を凝視している。

貴夜は衝撃によって棒立ちになっていたのだ。しかしそれも無理はなかった。

その少女は美しかった。まるで天才職人の手によるビスクドールのような、滑らかで白いその整った貌。白いドレスに身を包んだ、ほっそりとしたその身体。

見た目は貴夜と同年齢らしいが、その落ち着き払った仕草はどこかほかに年上のものに思える。

月光に照らされたその長い髪は白金に輝いていた。まるで月の光そのものを編みこんだように……。

幽玄の美を体現したような少女。

人の姿をした人ならぬモノ。

貴夜にはどうしても目の前に居る少女が、この世のものとは思えなかった。

不思議な色合いのその瞳は、左右の色を違えている。それがさらにその少女をまるで妖精のような、もしくは天使かとも思えるように見せているのだ。

「あなた　何者なの？　血族の一人なのかしら？」

少女の声はその外見と同様に美しく、まるで心地良い音楽のような調べを奏でた。だがそれ以上に、貴夜はその言葉を聞いて愕然とした。

それは先ほどの大男が貴夜に問うたのと、まったくおなじ言葉だったからだ。

「ちよつと。なんとか言いなさいよ」

その声には似合わないような言葉であった。口調も苛立たしげだ。だがそのことにより、貴夜の精神状態は現実に対応できるように回復した。

「ぼ、ぼくは……。ちよ、ちよつとまってくれよ！　いきなりなんだよ！　ぼくが何者かだって？　いったいそれがなんだと言うんだよ！　君もあの男のように、『闇の主』ダイク・ロードがどうか言い出すのか？」

貴夜がなかばキレ気味に叫ぶと、次の瞬間、その金髪の少女の表情が強張った。

「いまなんて言ったの？ 『闇の主』^{ダーク・ロード}と、そう言ったわね？ なぜあなたはその言葉を知っていると云うの？ 誰がその言葉を教えたの？」

続けざまに少女は詰問してきた。そしていつの間にか、貴夜と目と鼻の先に近づいていた。

目の前にある少女の、陶磁器のように滑らかなその頬と青と紫の瞳を見つめると、貴夜の頭はぼうつとしてきた。『美し過ぎて恐ろしい』と云う言葉が、まさに当て嵌まる容貌である。

「ねえ、なんで答えないのよ」

少女はさらに顔を近づける。甘い吐息が頬に触れるほどの距離だった。

心臓の鼓動が早く、そして強くなるのを感じた貴夜は、舌が痺れたようになにも答えることができなくなっていた。

「もう、いい加減になにか答えたらどうなのよ。まさかあなたが、世間を騒がせている『オーガ』ではないでしょうね？」

まるで宝石のサファイアとアメジストのような瞳は、魂が吸い込まれるような不思議な力を持っていた。

「だ、だからぼくはそんなこと知らないよ！ 『闇の主』^{ダーク・ロード}だの『オーガ』だの、なにを言っているのかさっぱりだ！ 君こそ何者なんだよ！」

貴夜はその不思議な瞳から強引に顔を背け、その力を振り切った。少女は一步後退し、小首を傾げながら貴夜を凝視した。そして白くたおやかな指を顎に当てる愛らしい仕草で、

「わたしの思い違いだったかしら？」と、呟いた。

その声には落胆と共に安堵の響きがあるように感じられた。

貴夜の全身から力が抜けていった。緊張に次ぐ緊張を強いられた精神が、いきなり弛緩してしまったのだ。

ガクガクする膝を両手で押さえ、大きく息を吸い込んだ。そしてまだこちらを見つめている金髪の少女を上目遣いで窺うと、少女は鮮やかな笑みを浮かべてこう言った。

「ごめんなさい。どうやら相手を間違えたみたい」

そして少女はゆっくりと後ろを向いた。

その視線の先には、あの不気味なマント姿の大男が立っていた。

始まるの夜 2

2

男は何気ない様子で緩やかに近づいて来た。そして十歩ほどの距離を開けて少女に相対すると、あの厭らしい歯を剥き出しにした笑みを作り、

「これはなんと云う僥倖だろうか。我が前に二人もの『貴き血』の持ち主が姿を顕わすとは。やはりこの地には獲物が濃いと言っことか」

と、低い嗚咽のような声で呟いた。まるで歓喜に堪えないと言った響きであった。

「ふうん。あなたが最近この地を騒がしている『オーガ』なのね。これほど短期間に飢えを満たそうとするなんて、あまりにも愚かな行動だと思わないの？」

少女は男の放つ異様な雰囲気、まったく動じていない様子だった。

「そのようなこと貴様が考える必要はない。我は貴様の血肉を受け継ごう。あの方がこの地に存在した名残を追っていて、これほどの血族に出会えるとは、我は真に運のいい男だ。これこそまさに、我こそが『真の主』へ近づくことを神が思し召したと言っ証に違いない」

男は身を包んでいたマントを広げ、両手を前に突き出した。その

胸には中世の鎧のような胸当てと、両腕には手甲が嵌められていた。胸当ては黒地に金の紋章。二匹の龍が相對している図だ。が描かれていて、腰には長剣が佩かれている。まるでファンタジー世界の戦士のような姿だと思えた。

「それでは同胞の少女よ。その身体を我に与えたまえ」

男は慇懃な口調で一礼した。だがその紅い目は、明らかに嘲弄の意を顕わしている。

「お断りよ。それに、わたしはあなたなんかとは違うのだから、勝手に同胞扱いはしないでちょうだい」

少女は動ずることなく、にべもない言葉を返した。

「ほう、同胞ではないと？ どう見ても貴様は『闇の種族』として存在しているではないか？」

「だからと言ってわたしがあなたのように、『血族』であるとは考えないで欲しいわね」

高慢な口調と表情で、少女は腕組してそう言い放った。

「小癪な小娘め！ よくもこの我に向かい、そのような生意気な口を！」

男は激昂し、長剣を引き抜いた。凄まじい殺気が立ち昇り、思わず貴夜はよろめき後退りした。だがその美しい小柄な少女は、冷たい微笑を貼りつかせたまま、

「たかが『オーガ』の分際で、このわたしに向かってそんな口を利

いいいいのかしら？」

と、さらに挑発するような言葉を叩きつける。

大男は咆哮を上げて少女に飛掛かった。十歩ほどの距離を一気に跳躍して、少女の頭上にその幅の広い禍々しい刃を振り下ろす。貴夜の目が追いていけないほどの、神速とも言える速さだ。

まるで鉈の刃のようにぶ厚く重そうな刃が、凄まじい勢いで少女の美しい金髪に触れようとした瞬間、少女は突然消滅した。いままで存在していた空間から、突如と消えてしまったのだ。

いや、貴夜にはそう見えただけで、実際は、少女は信じられないスピードで横っ飛びにそれを避け、大きく距離を置いて着地していたのだった。

勢い余った長剣の刃はアスファルトの地面を抉り、青白い火花を飛び散らせた。爆弾でも爆発したかのように、そのアスファルトの欠片は四方に碎け跳んだ。

男はすぐに、唸り声と共に長剣を持ち上げると、風を切りながら横薙ぎにその刃を払った。

（やられる！）惨事を予想し、貴夜は思わず目を瞑りそうになった。だがその切っ先が捉えたものは、おぼろげに残る白い少女の残像であり、生身の肉体は、すでに男の頭上遥か高く跳躍していた。

男はにやりと唇を歪め、左手を大きく振り上げた。その指先から銀色の光条が少女に向かって伸びていく。それが大型の短剣であると貴夜が気づいた時には、短剣は少女の胸に吸い込まれる寸前だった。

貴夜は声にならない悲鳴を上げた。少女の白いドレスの胸に禍々しい凶器が突き立ち、鮮やかな紅い色に染まってしまふ映像が脳裏

に浮かんだ。

しかし、そんな状況には至らなかった。少女の胸に突き刺さる前に、重そうな短剣は澄んだ音を立てて跳ね返ったのだ。

少女の胸元に光る環が形作られ、それが盾のように短剣を弾き飛ばしたのだ。

「『環の護り』だと！ 貴様！ 『教会』の魔術を使うのか！」

そう叫んだ男は憤怒の形相で齒を軋ませた。

「あら、防御の術さえあなたは知らないと言うのかしら？」

軽やかに地面に降り立った少女は、憎たらしいほど愛らしい微笑を浮かべ、

「やはりただの『血族』風情が、『黄昏に抗う者』と呼ばれしこのわたし、リーゼロッテ・クリステイナ・シュヴァルツヴェルトに挑むなど、あまりにも愚かしい行動だったわね。彼我の力の差を認識できないようでは、『真の主』などなれるわけがないわ」と、嘲笑うようにしてそう言った。

紅い髪と目の男は、少女の言葉を聞いた瞬間、凄まじい衝撃を受けたように身体を強張らせ、大きく目を見開いた。

「なんと……。『旧きもの（エルダー）』であるとは思っていたが……。まさか このような地に『七主』の一人が？」

男は信じられないものを見るような表情で、少女の顔を凝視しながら呟いた。

「あら、あなたはわたしを感知したのではなかったのかしら？ それにはご愁傷様ね。まあ、いまなら見逃してあげる。いまのわたしはちよつとだけ気分もいいから。だからこの少年のことは諦めて、さつさとねぐらに帰りなさい」

屈辱に青白い頬をさらに蒼褪めさせ、男は後ろ向きに跳躍した。その高さは絶対に人間のものではなかった。七階建てのビルの屋上まで、膝を大きく曲げる風もなく、一気に跳躍したのだから……。貴夜は呆然とその姿を見上げていた。これが夢ではないと知りながら、夢の中の出来事であつて欲しいと望んだ。

だが男の、屈辱に満ちた憤怒の怒声は、貴夜の鼓膜を確かに震わせる。

「今宵は退くとしよう、美しき『主』^{ロード}よ。だが貴様のその血、そして肉と魂を得る為に、我は再び貴様の前に現れよう」

男の姿はその声を響かせ、闇の中に消えて行った。

「さて、あなたをどうすればよいのかしらねえ」

呆然と男を見送った貴夜に、少女は可憐な笑みを見せてそう言った。

「ど、どうするって……？」

少女の言葉の意味が理解できず、貴夜はただオウム返しにそう聞き返す。

「バカねえ。あの『血族』の男は、またあなたを狙ってくるに違いないのよ？ 今回は偶々わたしが居合わせたから撤退してだけなの。

あなたはあの『血族』にとって、類稀なる獲物なんですもの」

「え、獲物？　なんでぼくが狙われなきゃならないんだよ！」

「だって　あなたは『貴種』なんですもの。わたしとおなじ『主』^{ロード}に変化することのできる、この世界でも特別な存在なのよ」

少女の艶やかな微笑が、妙に揶揄するようなものに見えた貴夜は、急に腹が立ってしまった。

「いい加減にしてくれよ！　いつたいなんなんだよ『主』^{ロード}って言うのは？　ぼくがなんでそんなものになるって言うんだ？　そんなのぼくに関係ない！」

苛立ち紛れに貴夜は叫んだ。途端に少女の笑みが強張った。

「な、なによ！　助けてあげたって言うのに、なんでわたしが怒鳴られなければならんって言うのよ！　あなたが『主』^{ロード}の素養があるのはわたしの所為じゃないわ！　それに、あの『血族』に狙われるのだってあなた自身の問題じゃない！」

良く言えば人形みたいに整った、悪く言えば無機質なその表情を崩し、少女は感情も顕わに叫び返してきた。

「だって　だって君はさっき、勘違いだったと言ったじゃないか。相手を間違えたって言ったじゃないか」

自分でも言い掛かりに近い、わけのわからないことで怒っているのは理解していた。だが、目の前で起きた非現実的な情景と圧倒的な恐怖が、貴夜にそのストレスを吐き出すことを強いていたのだ。

「それは間違えるわよ！ まさか覚醒してもいない人間のあなたが、あれほどあの方に似た波動を発しているなんて考えられなかったんだもの！ それに、あの『血族』だってあなたのことを『主』だと認識していたじゃないの！ どちらにしても、わたしがあなたの命を助けたことに変わりないわ！」

少女はムキになって言い返してきた。それは、さきほどの超人的な行動を見せた者との、非常にギャップが激しい仕草でもあった。

怒っていながらも愛らしい、普通の 普通ではないほど美しいが 人間の少女のような反応だったのだ。

「いや だ、だからさ、君の言っていることが理解できないんだけど……」

その顔を近づけてくる少女の剣幕に圧倒され、しどろもどろになつてしまった貴夜は、力なく両手を挙げた。

「理解できない？ ああ そうねえ、あなたはまだ人間ですものね」

少女はそう言ってようやく落ち着いていたようだった。何度も小さく頷きながら、ぶつぶつと口の中で呟いている。

「仕方ないわね。このまま放って置くわけにもいかないし……」

大きく憂鬱そうな溜め息を吐いた後、少女は右手を差し伸べた。握手を要請したのだと思い、貴夜はその手を握る。白く細い、そして冷たい感触の小さな手は、驚くほど柔らかかった。貴夜は妙にどきまぎとしてしまう。

「なにをしているのかしら？ 違うわよ。騎士の如くその手にキスをして、わたしに対する契約の証を返しなさい」

すると少女は命令口調でそう命じてきた。いままでと違う、まるで女王が発するような威厳たつぷりな口調だった。

貴夜は慌てて手を離し、少女の言葉に従った。白いたおやかな指をそろえて突き出されたその手を恭しく取り、軽くその甲に口づけする。

「これであなたとわたしに契約が生まれたわ。わたしはあなたを導き護り、あなたはわたしに従う。わかったわね」

少女は手を引くと、にんまりとした笑みを浮かべた。

始まりの夜 3

3

騙された。いや、そうではないのだろう。だがこの展開に、貴夜はついていけなかったのだ。

少女に促されるまま、貴夜は自宅に少女を連れ帰った。幸い姉の初音はまだ帰宅していなかったので、すんなり少女を部屋に招き入れることができた。

もし姉が自室に少女を　ましてや人間離れした美しいこの少女を　連れ込んでいる貴夜の姿を見たのなら、どれほどの大騒ぎになることやら……。

そう思うと貴夜はわずかに身震いした。

幸いといっているのか、姉は今日も遅くなるはずだ。

地元の音楽大学に通う姉の初音は、近々行なわれる大学内のコンクールの為、遅くまでレッスンに励んでいるだろうから……。

安堵しながらも、それでもそろそろと廊下を進む貴夜であった。

少女は貴夜の部屋にあるベッドの上に腰掛け、部屋のあちこちを見回している。好奇心も顕わに、目を輝かしている。考えてみれば自分の部屋に年頃の少女を招いたことは初めてだったが、貴夜にはその事実緊張する余裕もなかった。それに、どちらにしても二人きりではなかったのだ。

貴夜の家に向かう途中、リーゼロッテと名乗った金髪の少女は、

小さな女の子を待たせていたのだ。

シエラとリーゼロッテが呼んだその女の子は、まだ小学校低学年ほどに見える少女で、漆黒の豊かな髪に鮮やかな赤の大きなリボンを飾った、これまた愛らしい少女であった。惜しむらくはその表情に、ほとんど感情と言うものが顕われないことだろう。ただ古めかしい黒のドレスに身を包んだ少女は、まるでフランス人形のように愛らしく、リーゼロッテと同様に貴夜に緊張を強いていた。

シエラは無駄口を一つも叩くことなく、リーゼロッテの隣にちょこんと座り、貴夜が淹れた温かいミルクティーを飲んでいる。まるで小さな貴婦人の如く、気品溢れる仕草であった。だがそれは、この可憐な少女がやはり見た目通りの、年相応の人間ではないと言う証になっている。

「さて、そろそろ説明してくれないかな？　ぼくがいったい何者だというのか。そして君達が何者なのかを」

貴夜は自分の机の椅子に座り込み、疲れたような声でリーゼロッテに問う。

ベッドに両手を突き、四つん這いになって体勢で、床に置いてあるテーブルの上のノートパソコンを、興味深げに見つめていたリーゼロッテは、慌てて居住まいを正した。そして軽く咳払いをすると、厳肅そうな面持ちを取り繕う。

「それでは教えましょう。まずわたし達が何者なのか」

リーゼロッテは両目を瞑り、歌うような声で話し始めた。

「わたし達は『闇の種族』と一部の人間に呼ばれている、人の種を

超えた存在なのよ。まあ、一般的には吸血鬼だの人狼だの、そして鬼だとか呼ばれている不死の生命体。それがわたし達なの。ただわたし達も人間から発生する存在で、その精神構造はそれほど人と違うものではないわ」

貴夜は目をぱちくりさせ、リーゼロッテの言葉を反芻した。それは到底信じられるものではない。特にオカルトなど信じない貴夜にしてみれば……。

だがいまの貴夜には、彼女の言葉を否定する気にはなれなかった。すべてを信じるというわけではないが、つい一時間前に行なわれたリーゼロッテとあの犬男とのやり取りを、この目ではっきりと目撃していたからだ。それでも……。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。いくらなんでも吸血鬼とか狼男ってのは信じられないなあ。『闇の種族』って言うのは、要するにモンスターだと言うのかい？ それで、君らも血を吸うのか？」

「だから一般の人間が認識するのなら、そう言う存在になるってことよ。世界各地で伝承や伝説が残っているでしょう。人間は『闇の種族』と一括りに称しているけれど、『不死者』^{ノスフェラトゥ}のすべてが怪物みたいな言い方は気に食わないわ。それに、わたしがそんな化け物に見える？」

「それは 見えないけど……。でも、君も人間の血を吸うんだろ？ それじゃモンスターと言われても仕方がないと思うけれど」

貴夜の言葉に、リーゼロッテはわずかに傷ついた表情を浮かべた。

「確かに多くの『闇の種族』はそうでしょうね。エネルギーを

もつとも有効に摂取できる手段ですもの。でもわたしはいわゆる吸血鬼とは違うわ」

リーゼロッテは身を乗り出し、貴夜の目を覗き込むようにして迫ってきた。

思わず貴夜は身を引こうとしたが、リーゼロッテの赤と青の瞳に見つめられ、体中が強張ったように動けなくなった。

「あなただって 『闇の種族』 の種を持っているのよ。しかも普通の人間よりも強い種を」

「ぼくが？ なんてぼくが……」

「人間からわたし達 『闇の種族』 が発生すると言ったでしょう。わたし達だって木の股から生まれたり、なにもないところから湧いて出たりするわけではないの。もつとも、その多くは 『血族』 として 『従者』 として人間から変容してしまうのですけどね。でも、あなたはわたしのような 『主』 として覚醒する素養があるわ」

「それって どういう意味なんだい？ 『血族』 に 『従者』 、そして 『主』 とか、その違いはなんなんだよ。それに、吸血鬼も鬼も、ましてや狼男も一緒にたにされているのはなぜなんだい？」

貴夜はすでにリーゼロッテの言葉に興味をそそられていて、信用するとかしないとかは二の次になっていた。現実に対応しなければ、自分は死んでしまうのだから、荒唐無稽な話でも信じざるを得ないと言っのも理由だったが……。

「それは 『闇の種族』 と言っものが、多くの吸血鬼伝説から名づけられたからなのよ。元々吸血鬼伝承と言っのはスラブ系民族が発祥のもので、クロアチア語やセルビア語で吸血鬼を表わすヴォルコド

ラークと言う言葉が、『狼の毛皮をかぶった人間』を意味するところから来ているの。

近代では別の怪物だとされているけれど、元来、人間とは違った人間のことをすべて『闇の種族』とすべきなのよ。結局、人類がその土地と風土により、名称をつけてそう区別していく内に、吸血鬼と人狼、そして様々な悪鬼が別の存在だと思われるようになっただけなの。

因みに『闇の種族』にはまず、『主^{ロード}』と呼ばれる者が存在するわ。それは始原のものであり、原初に現れたるもの。人間と言う生物から分かれた、それ以上の能力を持つある意味超人類と考えられる者たちのことよ」

そこでリーゼロッテは自嘲気味な、暗い笑みを浮かべた。

「まあ、その能力自体は昔の人間が神とさえ感じたことでしょうね。もっとも、そのメンタリテイは人間とそう変わらないわ。ただ長く生きていると、ちよっと変わり者になってしまうのだけど…」

貴夜はそんなリーゼロッテの様子を怪訝に思ったが、なにも言わずに彼女が話を続けるのを待った。リーゼロッテはやがて桜色の唇を開き、また元の口調に戻って説明を再開した。

「『血族』と『従者』は　まあ、簡単に説明すれば、『主』によって生み出されたこれもまた人外の生き物ってことね。

あなただって吸血鬼が吸血行為によってその仲間を増やすと言う伝承は知っているでしょう。その結果、『血族』と『従者』が造られるのよ」

「血を吸われた人間が吸血鬼になるってのは、昔映画でも見たこと

あるけれど、それが『従者』と『血族』にわかれるのはどうしてなんだい？ それに、狼男や鬼はどうやって仲間を造りだすんだよ」

「だから言ったでしょ。もとは吸血鬼だろうが人狼だろうがおなじ存在なのよ。それに、吸血行為だけが『血族』達を造りだす行為ではないわ。『血族』は文字通りの意味で、『主』^{ロド}にとっての『仔』なのよ。血を分けた一族の意味ね。『従者』の言葉の意味はわかるわよね？ 一族の中ではただの従僕で使用人のことよ」

「ああ、それはわかるよ。でも、どうしてそんな違いがでるのさ。どちらにしても『闇の種族』であるのは変わらないだろう？ 『主』^{ロド}だとか『血族』だとか『従者』だとか、なんだかまるで人間とおなじように差別社会だな」

すっかり温くなったコーヒーを啜り、貴夜はボソリと呟いた。

「まあ、仕方がないんじゃないのかしら。しよせん元々が人間だったものなのだから。なんと言っても、その出自によって能力の差は大きいんですもの。『主』^{ロド}はあくまでもその頂点に位置し、『従者』はいつまでも僕に過ぎないわ。」

もっとも、『血族』だけはちょっと特別な存在だけれど……」

リーゼロットは愁眉を寄せて声を途絶えさせた。

「特別な存在？」

「ええ そうね。『血族』と言う者は『主』^{ロド}の一族として加えられることはさつき教えたわね。つまり、『主』^{ロド}ほどの力を最初から持っているわけではないにしても、長い生の間、『主』^{ロド}と変わらない力を得る者も居るわ。『古の者』^{エルダー}とも呼ばれる彼らの中には、

自らを『闇の貴族』とも名乗って、この人間の世界に自分たちの社会を造り上げている者も存在しているの。しかも人間社会の中で成功している者もいるわ。なんと言ってもこの世にもっとも多い『闇の種族』は、彼ら『血族』なの。だから通常、『闇の種族』と呼ばれているのは彼ら『血族』のことだわ。きつとあなたが 普通の人間達が知っているヴァンパイアのイメージに近いのは彼らのことね」

「へえ、それじゃ『主』^{ロード}って言うのは希少な存在なんだ？」

貴夜はおどけたようにしてそう言った。急に詰め込まれた闇の知識に、少々疲れ始めていたのだが、それを悟られないように陽気な声を出したつもりだった。

「信じていないのね？」

リーゼロッテが唇を尖らせた。

「えっ？ い、いや、そんなことはないよ。ただいきなり色んなことを教えられたので、ちよっと脳が疲れ始めているのさ」

貴夜は慌てて取り繕うように言いわけした。

ただ実際に、精神的な疲れと空腹が思考の妨げになっているのは明らかだ。もう夕食を摂らないまま、午後十時を過ぎてしまっている。

「ところでおなかは空いていないの？」

貴夜はそう訊ねた後、慌てて口を閉じ、リーゼロッテの顔色を窺った。

リーゼロッテが人間ではないのだと、今時分が語っていた『闇の種族』とか言う存在なのだと言念していたのだ。

リーゼロッテの食事と言うものを想像して、一瞬だが、彼女が貴夜の首に咬みついている場面を想像してしまう。

だが、リーゼロッテの応えは貴夜が危惧していたようなものではなかった。

「そう言ってくれるのを待っていたの」

はにかみながらリーゼロッテは微笑んだ。

「正直言って、わたしは空腹で死にそうだったのよ」

「それじゃあ、とりあえずなにか食べ」

そこで思わず言葉を失った貴夜は、恐る恐る訊ねた。

「君はどう言ったものを食べる　いや、なにか食べたいものはあるのかい？」

リーゼロッテはくすくすと笑い、

「なにを心配しているのよ？　わたしは人間とおなじものを食べるわ。別に生き血なんて欲しくないし。ああ、でも日本食にはまだ慣れていないから、ナットウとかスシなんてのは無しにして」

始まりの夜 4

4

「あの少年をどうしようと言つのですか、ミレディ？」

貴夜が部屋を出たのを見送った後、彼が退室するのを待っていたかのように、シエラがそう口を開いた。

「あら、別にどうしようなんて思っていないわ。ただあの『血族』から守ってあげなければ思っただけよ」
リーゼロッテは明るい口調でそう答えた。

「なぜあの少年を守ろうとするのです？ 我々の目的には関係ないことではありませんか。私達はあの方の行方を追う為に、この極東の島国へやって来たのですよ。ヨーロッパを離れてまでここに訪れたのは、『血族』の一人を滅ぼす為でも、ましてや人間の少年をそれから守ることもありません」

シエラの声は普段と変わらず、平板で淡々としていた。はつきりとリーゼロッテを批難しているわけではないが、リーゼロッテの行動を諷めようとしているのは間違いない。

「あの方を追う為にも、あの『血族』を捕まえなければならぬのよ。それにはタカヤを見張っているのが一番だわ。あの『血族』は、タカヤの血に潜むその力を得ようと考えているに違いないのだから、自分でも言い逃れだとわかっていた。正論ではあるが、理由としては弱いのだ。しよせん、リーゼロッテたちにとっては『血族』も、そして『主』^{ロク}の資質を持つと言つてもただの人間に対し、積極的に

関わる必要はまったくないのだ。

「あの『血族』があの方に開わりがあると言うのですか？ 確かに、あの『血族』の波動はあの方に似ているものでした。ですがそれは、あの『血族』があの方の眷族の一人であると言うに過ぎないのでは？ あの方の係累はこの二百年の間に、世界中で増え続けていますから、特に珍しいものではないでしょう？」

それはそうだ。あの方が変わってしまい、己の『血族』を無制限に増やしていった結果、あの方の『貴き血脈』は増え続けている。だからこそ、リーゼロッテはあの方の波動をはつきりと感知し辛いものになっているのだ。あの方はあまりにも無造作に『血族』を増やしすぎている。現在の苦労の原因がそれなのだから……。

それでも。

リーゼロッテにはどうにも引つ掛かるものがあるのだ。

確かにあの現場に訪れるきっかけとなったのは、あの傲慢な『血族』の波動を感知したからだ。だがその場に辿り着いた時点で、リーゼロッテが感じた大きな波動は、貴夜と言うその存在からであった。

貴夜は明らかに普通の人間だ。『主』^{ロード}の資質を過分に秘めているとは言え、現状ではあのように凄まじい波動を放つものではない。だからこそ、リーゼロッテは勘違いしたのだ。

あの方自身がそこに居るのだと……。シエラは淡々として言葉を続けた。リーゼロッテの思考を読んでいるのだろうか、主人の答えを聞かぬ内に、自分の考えをさらに説明しようとする。

「あの方がこの国にやって来たのは間違いないでしょう。そして、

あの『血族』もあの方を求めてやって来たに違いありません。この地ではここ最近、明らかに『闇に種族』の仕業と思われる事件が起きているそうです。次々に獲物を狩りだしているのはあの『血族』に間違いありません。その目的は――」

「あの方を喰らい、己が『真の王』の座に就こうとしている　でしよう？　自分より旧い、上位の『血族』や『主』^{ロード}を喰らってその力を得ようとするのは、『血族』には珍しくない考えだわ。まあ、あの方があのような『オーガ』などに『喰われる』など有り無いけれどね。

わたしだってそんなことはわかっているのよ」

事もなげにリーゼロッテはシエラの説明を遮った。

「ならばあのような者、放って置いても良いのではありませんか？　ミレディが関わる必要などありません。たとえあの方の行動を見張っていたとしても、到底あの方に辿り着けるとは思いません」

当然の如く、シエラは反論をやめる事はない。こうなってしまうば、議論をし尽くしても無駄だった。シエラは本当に強情な使い魔なのだ。

だがそんなシエラも、次に発せられたリーゼロッテの言葉に沈黙した。

「あんな『オーガ』なんかどうでもいいのよ。でも、タカヤには興味があるわ。なんて言ってもあの方にほぼ等しい波動を発散する『主』^{ロード}　いえ、『主』^{ロード}の資質のある人間ね　などこの八百年の間、まったく見たことはなかったわ。タカヤはきつと、あの方に繋がる人間よ」

リーゼロッテの自信溢れる表情を見て、シエラはわずかに眉を顰

めた。

「でもそれはミレディの憶測に過ぎません。あの方がこの国に渡ったのは十八年前、あの少年があの方とどう関わったと思われるのです？ それに、ミレディはあの方の波動を感じたと仰りますが、私にはなにも感じられません。もちろん、あの少年が『主』^{ロート}たる資質を備えているのは感知できませんが……」

「ばかね。あの方の波動を感じられるのは、あの方の直接の『血族』か、わたしのようない子『養い子』くらいのものだわ。いくらあなたがあの方に造られた『使い魔』であろうとも、そうそう感知できるはないの」

リーゼロッテが自慢げにそう言い張ると、シエラは幾分面白くなさそうな顔をした。表情の変化の乏しいシエラにしては、それでも大きな変化である。

「そう言うものでしょうか……？」

「そうなのよ！ それでわたしはタカヤとしばらくは一緒に居ようと思うの。それに、あの『血族』のことも少々気になるしね」

貴夜が両手にトレイを抱え、階段を昇りきると、部屋の中からリーゼロッテの声が聞えてきた。なにやらシエラに向かって熱弁をふるっているようだった。

「どうしたの？ とりあえず食事を持ってきたんだけど……」

貴夜が部屋に入るなりそう問いかけると、リーゼロッテは片手を振って「なんでもないわ」と事もなげに答えた。シエラは無表情の

まま、視線を貴夜から外した。

「なにか言い合いをしていたように聞えたけど」

「言い合い？ 言い合いなんかになるわけないでしょ？」と、リーゼロッテ。

貴夜は料理を載せたトレイをテーブルの上に置くと、

「それならいいんだけど……」と呟き、シエラの様子を窺った。

シエラはそっぽを向くようにしているが、その表情にはなんの感情も表れていないようだ。

「そんなことより早く食べましようよ。わたし、今日はなにも食べていないのよ」

そう言いながらリーゼロッテはトレイの上を凝視していた。

トレイには三人分のビーフ・シチューの皿、そしてフランスパンをカットしたものとサラダの入ったボールが三つ。

暖め直されたシチューの芳香にリーゼロッテは頬を緩ませ、その瞳は魅せられたように釘づけにされている。

「ああ どうぞ。口に合うかわからないけど……」

そう言ってスプーンを手渡すと、リーゼロッテはにっこりと艶やかな笑みを浮かべた。

「ありがとう、タカヤ」

そして。

スプーンを握ったリーゼロッテは健啖な食欲を貴夜に見せつけた。

あくまでも品良く、小さく口を開けて食べ物を口にするのだが、その手は休むことなく、あっと言う間に自分の皿のシチューをたい

らげてしまった。

シチューはまだ残っている。姉がシチューを作る時は大鍋で大量に作り、それを小分けして冷凍するのだ。自分が夕食を用意できない時に、それを温めるだけで貴夜が食べられるように……。

スライスしたフランスパンで、名残惜しそうに皿を拭っているリーゼロッテに向かい、

「温めればまだあるんだけど……」

と、貴夜はおずおずと告げた。

途端に目を輝かせ、リーゼロッテは天使の微笑を浮かべる。突き出された両手には、汚れ一つない白い陶器があった。

無言で差し出された綺麗になった皿を、貴夜はそろそろと受け取った。

「君はいいの？」

黙々と小さな手でパンを噛んでいるシエラに、貴夜は優しく訊ねる。

「私は結構です」

無感情にそう答えるシエラの皿は、まったく手がつけられていなかった。まったくもって子供らしくない言葉だと貴夜は感じた。

「ビーフ・シチューは嫌いだったのかい？」

「いいえ。私は元来小食なだけです。気になさらないで下さい」

そう答えたシエラの皿を、リーゼロッテはすかさず自分の手に取る。

「そうそう。シエラはあまり肉類を好まないのよね？」

そしてまた、リーゼロッテの右手に光る銀の匙

ただのステン

レス製だが　　は、すこし冷めかかったシチューを掬い始めた。

結局、リーゼロッテは四杯ものシチューと一本丸ごとのフランスパンを平らげた。見かけによらぬその食欲に、貴夜はただ呆然とするだけだった。

（あの細い身体に、よくもまああんなに詰め込まれるものだなあ……）

食後に淹れた紅茶を飲みながら、優雅な仕草でカップを口に運ぶリーゼロッテを見て、感慨深く貴夜はそう思った。

「満足してもらえたかな？」

その表情を見ればすでにわかり切っていたことだが、貴夜はリーゼロッテに問いかけた。

「ええ、もちろんだわ。あのシチューは絶品だったもの。あれはあなたが作ったものなのかしら？」

「いや、あれは姉さんが作ったものだよ。気が向くと大量に作り置きしているんだ。ぼくが一人で居る時の為に……」

「そう……。あなたはその人に愛されているのね」

そう言って微笑むリーゼロッテの瞳に、微かな羨望の色が現れていた。もっとも、貴夜はそれに気づかず、

「はい？　そ、それはどうなのかな……？」と、奇妙な返事を返す。途端にリーゼロッテの瞳が、燃え上がるような輝きを見せた。それは剣呑な輝きを秘めた不思議なほど美しいものだった。

「タカヤ！ あなたはあのような料理をいつも食べていながら、その作り手の愛情を感じていないの！」

リーゼロツテは怒ったように問い質した。

「へっ？ なななにを言っているんだい？」

リーゼロツテの放つ圧力に、貴夜は思わず後退りしてしまう。

「あの料理は食べる者への あなたへの愛情に満ちていたわ。それを気づかないとは、なんてあなたは薄情な男なの！」

リーゼロツテは冷たい怒りと呆れたような表情の入り混じった顔をしていた。

「は、薄情？ な、なんでぼくが薄情だって言うのさ！ ぼくだって初ネエにはいつも感謝しているよ！ で、でも、そのシチューに愛情がこもっているとかわかれても、ただ美味しいとしか思っていないよ！」

「だからそれが薄情だと言っているのよ！ あなたはいつも食べなれているからわからないのだから！ あの料理は、味も栄養もあなたの為にだけに作られたものだと言うことを主張していたもの」

「な、なんでそんなのがわかるんだよ！ 料理の味なんかでそんなのわかるわけないだろ！」

リーゼロツテの言い草にカチンときた貴夜はそう言い返した。

「わかりますわ。ミレディは『主』ドですもの」

静かに、そして淡々とした声でシェラがそれに答えた。

「はあ？ 『主』^{ローテ}ってのはそんな便利なものなのか？」
貴夜は胡乱な視線でシエラを見つめる。その視線に、シエラは真つ向から見返してきた。

「そうですね。便利な力を持っているのです。『主』^{ローテ}と言う存在は」
「ふ……ん？ どう言う原理なのか教えて欲しいね」

胡乱な表情を変えることなく、しかめっ面しく貴夜は訊ねた。

「あなたに理解できるかわかりませんが、これは初步的な『概念解読』になります。固有の物体に宿る概念と、その製作者の残留思念を読み解くことにより、そのモノの成り立ちや成分、そしてそれに込められた思いを知ることができる、そう言った能力なのです。もちろん、ミレディはそれを自慢の舌で味わうことによって、あなたの姉の思念を解読したのです」

小面憎いシエラの言葉に、貴夜はちよつとだけムツとした。理解できないかもしれないだって？ そんなことはない。小難しい言葉で煙に巻いているような説明だったが、貴夜はシエラの言葉を理解していた。だが、納得はしていない。

「舌で解読したってなんだよ。味覚でそんなことがわかるのか？ ぼくのことをばかにしているんだらう？」

「そのようなことはありません。私はミレディの舌の能力を的確に説明しています。ミレディは類稀な味覚と感性を有しているのです。もちろんその力が、ミレディの食に対する欲望を基礎とするものであるのは間違いありません」

シエラは平板な調子で、それでいてはつきりと断言する。

「シエラ！ それじゃあ、わたしが食いしん坊だと言っているみたいじゃないの！」

リーゼロッテがいきなり口を挟んだ。

「みたい　ではありません。はっきりとそう言ったのです。だいたいいつもミレディは、食事に対しての欲望が強すぎます。本来、ミレディの肉体はそのようなものを必要としないはずですが」

「そそ、そんなんじゃないわ！ わたしはただ人間の食事を取ることによって、人の心や生き方を忘れないようにしているだけよ！」

「ならばそのように大量に摂取する必要はないと思いますが」

烈火の如く勢い立つリーゼロッテに、シエラは平板な声で返した。リーゼロッテは齒噛みしながら、なにか言い返そうと考えている。

シエラは冷たいとさえ見える超然とした表情で、自分を睨みつけているリーゼロッテの視線を受け止めていた。その間に見えない火花が散っている。

急に話題から取り残された貴夜は、二人の舌戦　まだ序章に過ぎないだろう　を呆然と見守っていた。だがこのまま放って置いてはいけないと言う、本能の叫びに導かれるままに、違う話題を振らなければと考えた。

「そ、そう言えば君達、やけに日本語が上手いんだね？」

一触即発の空気の中、貴夜は二人の気を逸らすように話しかけた。

二人は同時に貴夜を見て、そして顔を見合わせる。やがてクスリと笑ってリーゼロッテが口を開いた。

「あたりまえよ。なんと言っても、あなたの言葉を借りているんですもの」

「ぼくの言葉？」

「ええ、あなたと話す時はあなたの言葉を使っているのよ。実際はわたしの知識の中に、日本語なんてありはしないもの。あなたの語彙であなたに話しかけているだけよ」

「それじゃ あの前と話していたのは……？」

「ああ、あれはあなたの思念をトレースしていたから。だからあなたには日本語で聞えていただけよ。どのように変換されているかわからないけれど、わたし達の言葉は、あなたの中にある語彙と語感によって作られているはずよ」

「ぼくの中の語彙？」

「その通りです。私達の言葉はすべて、あなたの知識にある言葉に変換されてあなたに聞えているのです。私達の思考は母国語であり、まず、あなたに話しかける際もそのままです。でも、あなたに向かって口に出される瞬間、それはあなた達の国の言葉に変換されるのです」

シエラの重ねた説明によって、ようやく貴夜にその意味するところが理解された。

「なるほど……。原理は良くわからないけれど、君らは対話する人間の思考を読み、そしてその相手の理解できる言葉で会話できると言うわけだな？　だけど本当にその言葉の意味を理解して話しているわけではないと」

「なかなか飲み込みがいいじゃない。だからわたしの口調がこうなものも、あなたの語彙のせいなんだからね」

腰に両手を当て、胸を張るようにして貴夜を見上げるリーゼロッテの姿を見て、まるで『闇の種族』と言う人外存在などとは思えなかった。

「ちよっと！　本当にわかっている？」

「う、うん、わかった」

ぼんやりとリーゼロッテの姿に見惚れていた貴夜は、慌ててそう答える。

リーゼロッテは満足気な笑みを浮かべ、何度も頷いた。そんな様子を見て、シエラは軽い吐息を漏らした。

「ところで　この家には他に誰も住んでいないの？」

「いまはいないけど、もうすぐ姉さんが帰ってくるはずだよ」

リーゼロッテの問いに、貴夜はすぐに答えた。

「そう。それじゃあ　取りあえず部屋はいくつも余っているわね」

「それは　どついう意味さ？」

貴夜は胡乱そうにリーゼロッテを見やった。

「わたし達の部屋があるか確認したに決まっていますでしょ」

「君達の部屋？　それって　まさかぼくの家泊まるつもりなん

じゃ……」

「だからそう言っているのですよ！」

「ちょっと 待ってくださいよ！ そんなこと」

無理に決まっている。貴夜がそう言い掛けた時、階下から姉の初音の声が響いた。

「ただいま。お姉さまのお帰りだぞ！」

その声から、大分聞き召しているようだった。

貴夜の顔色は一気に蒼ざめていった。

聖なる騎士（前書き）

聖なる騎士

「あれが『黄昏に抗う者』と呼ばれし『七主』の一人なのだろうか……？」

黒いロングコートを羽織った男は、古びたビルの屋上でそう呟いた。

ヴィトリーオ・エルレッティ。それが彼の名前だった。

ヴィトリーオは眉を顰め、眼下の一軒家で繰り広げられた喧騒を見つめながら、己がいままで教えられたことを、そして『十字軍』の『異端処理官』として経験してきたすべてを、いとも簡単に否定されたような気がしていた。

どこか釈然としない思いのまま、ヴィトリーオは術を解いた。

『魔術師の目』ウィザード・アイの呪文は比較的初歩の魔術だ。遠くの対象を監視する目的に使われるその魔術は、通常は『使い魔』を通して使用される。

だがヴィトリーオには『使い魔』などいない。だからその魔術は一般の『魔術師の目』ウィザード・アイとは微妙に違うものでもあった。精度は及ばないが『使い魔』をその場に置く必要はない。

ヴィトリーオは『聖騎士』の位階にある『異端処理官』として、この日本に派遣されてきた。つまりは『闇の種族』ダーク・レイスと呼ばれている神の敵対者を滅殺する為に……。

だがヴィトリーオに下された使命は、『七主』であるリーゼロッツ

テ・クリステイナ・エツシェンバツハに対するものではない。この街で多数の犠牲者を生み出している、『食人鬼^{オウガ}』と分類される『闇の種族^{ダーク・レイス}』であるジャン・ルイ・オートブレーブがターゲットなのだ。

ジャンはパリで生まれた『血族』だった。しかも『七主』の第一位たる『真王』の『血族』だと確認されていた。

だからであろう、まだ『闇の種族^{ダーク・レイス}』としては二百年ほどの『血族』であるが、その能力は千年の生を経た『旧きもの（エルダー）』に匹敵するらしい。しかも『食人鬼』として犠牲者の血と肉と魂、つまりすべての物を奪い取るだけに、その力の上昇率も高い。しかも彼は。

いや、彼の過去などはどうでも良い。ヴィトリオの獲物としては最上級の『異端者』なの間違いないのだ。この任務に対して、ヴィトリオはその能力のすべてを使わなければならないだろう。それほどの難敵なのだ。

しかし……。

ヴィトリオは偶然にも、それよりもさらに手強く、恐ろしい『異端者』を発見してしまった。それがあのリーゼロッテと言う名の美少女であり、『黄昏に抗う者』の通り名を持つ、始原の脅威である『七主』の一人であった。

『教会』からは『七主』に対する敵対行動は諫められている。それはあまりにも危険で、魔術の奥儀を極めた者であろうと、『聖騎士』と呼ばれている神の戦士であろうと、その手に余る存在だから

である。

究極の『魔人』である七人の『闇の主』。その力はまさに『魔神』と比肩すべき存在であり、究極の力の象徴でもあった。

神の恩恵を受けしヴィトリオであろうとも、『血族』と同等の戦闘力を誇る『聖騎士』である彼であろうとも、その戦闘力には天と地の差があるのだ。触れるべき存在ではない。それにヴィトリオが『七主』と敵対することは、決して教会が許してはくれないだろう。危険だからと言う理由だけではないのだ。

しかし。

ヴィトリオは『異端処理官』として『黄昏に抗う者』と言う存在を見逃すことができなかった。そのように教育されていた。

神にあだなす、遍く闇に蔓延る者達を、秘密裏に『処理』するのが自身の役目であり、そして天から与えられた至高の義務なのだ。

「さて」

ヴィトリオは眉を顰め、今後の行動について計画を見直さねばならないと考えた。

「どうしたものかな？」

腰の長剣　　ヴィアラウディと名づけられた法儀聖剣　　の柄を握り、自問の眩きを漏らしたヴィトリオは、答えの出ない思考を潔く停止した。

まずは『オーガ』の始末が先決だ。教会からの任務を終了させな

ければ、『七主』に関わることもできない。それに、『オーガ』一人だけが『処理』の対象ではないのだ。

『オーガ』 ジャン・ルイはこの地に辿り着いてから多くの『従者』を得ている。それがこの街で起きている凄惨な殺人事件の犯人であり、これからも犠牲者を生み出す禍でもあると、ヴィトリーオは知っている。

ジャン・ルイは人の血肉を余すところなく喰らい尽す。故に殺人事件の証を残したりしない。つまり事件として死体が残っているものは、すべてマナーのなっていない『従者』の仕業であると判断できる。

『オーガ』が生み出した『オーガ（人喰い鬼）』を屠ることも、いずれヴィトリーオの使命に他ならないのだ。

そうと決まれば。

ヴィトリーオはビルの屋上から辺りを睥睨した。

『オーガ』の気配は完全に隠蔽され、いまだ感じられないが、その『従者』である者は、いまだ人の姿で擬装して、今宵も獲物を求めてさすらっているだろう。

ヴィトリーオはコート裾を翻し、たったいま感じ取った血生臭いその気配を辿る為、ビルの屋上から飛び降りた。

まずはあの『オーガ』の僕を処理しなければならない。

大元を断たなければヴィトリーオの任務は終了しないが、これから起こるであろう惨劇を無視することもできないのだ。

すくなくともヴィトリオは、『聖騎士』の誓いを神に捧げた、誇り高い慈悲の心を持った聖なる戦士なのだから。

無作為に飛ばした思念の波が、すぐに異形の気を感じた。

それは明らかに人とは違う、確かに『闇の種族』の波動であった。そして闇を屠る『聖騎士』は、闇に紛れて獲物へと向かった。たとえ彼の姿を目撃した者がいても、はっきりとそのすべてを認識できはしないであろう神速のスピードで。

腰に下げられた相棒は、ようやく吸えるであろう魔物の血に、狂喜の波動を放っていた。

(そう急かすな。いまにゆっくりと味あわせてやるよ)

相棒である長剣ヴィアラウディに、心の中でそう言い聞かせると、ヴィトリオは目指す獲物に向かって跳びかかった。

押しかけ師匠

「一体どう言うことなのか説明して」

そう問う初音の声は平板で、寒々とした口調でさえあった。

一人掛け用のソファに脚を組んで座り、顎を突き出して睥睨する初音の姿は、まるで臣下を見下ろす女王然としていた。

「い、いや、だからその……」

貴夜が口籠もってしまうのは仕方がない。なんとと言っても、この世で唯一、貴夜の頭が上らない人物が、この一見たおやかで優しそうな女性であるのだから……。

だがいま初音は、貴夜以外には見せないであろう本性を顕わにしている。それは外での初音とは、まったく違う姿であった。

柔らかくウエーブした腰まである髪をかき上げ、気だるそうに貴夜を見つめる視線には、苛立ちと困惑を押し殺したような様子が窺えた。

「だからなによ？ どうしてわたしがいないうちに、女の子なんか引っ張り込んでいるの？ それも今夜は泊めたいですって？」

「で、でもそれは　その……」

初音の顔色を窺うようにして、貴夜は言い訳をしようとしたが、初音の氷の視線で睨みつけられると、またもや言葉を継げずにいた。

「そうタカヤを困らせないで欲しいわ。わたしがこの家に住むのは必然なんですからね」

いきなり黙り込んでいたリーゼロッテが、まるで従者に向かって命じるような声で初荷に告げた。

「あなたは誰なの？ 貴夜とはどういう関係なのかしら？ どう見ても日本の方とは思えませんけど？」

初音の言葉は穏やかであったが、その口調は冷ややかなものだった。

「わたしはリーゼロッテ・クリステイーナ・シュヴァルツヴェルト。タカヤの恩人であり、タカヤの師でもあるわ。だからここでタカヤと住む方がどちらにとっても都合がいいの」

負けずに高慢な口調でリーゼロッテは答えた。

「へえ？ 貴夜の恩人で師ねえ？」

「そうよ。わたしがいなかったら、貴夜は今頃死んでいたのよ。それを救い出してあげたの。それに、貴夜はいまだに狙われているから、わたしが護ってあげるのよ」

「死んでいた？ 護ってあげる？ それはどう言うこと？」

その答えに初音は片側の眉を上げ、そして胡乱そうに呟いた。

「決まっているでしょ。貴夜は」

リーゼロッテが切り口上でそう言いだしたの、貴夜は慌てたよう

に遮った。

「ちょっと待ってくれよ！」

リーゼロッテは横槍を入れられたのが面白くないようで、その色の違う両目で貴夜を睨みつけたが、無理に言葉を続けることはなかった。

「ば、ばくは 実はイジメに遭ってたんだ！」

貴夜はそう初音に告げると、唇を噛み締めた。実のところ、これだけは姉に知られたくなかったのだから……。

「イジメ？ それはどう言うこと？」

初音の音が低く響いた。その声には驚きと、押し殺した怒りに満ちていた。

「誰よ！ 誰があなたを」

「そ それは……。言いたくない」

「なぜ？ なぜ言えないのよ！」

「姉さんがそんなだから言いたくないんだよ……」

力なく貴夜は呟いた。

取りあえずリーゼロッテの言葉を誤魔化す為に言ってしまったとは言え、誰にも増して姉には知られたくなかった。もし知られたの

なら……。

貴夜は三年前のことを思い出し、思わず身震いする。

貴夜が中学生の時分、やはり貴夜は一部の生徒に目をつけられていた。そして生傷の絶えない生活を三ヶ月ほど過ごしていた。いま思い起こせば、あの時の方が酷い状況だったように思われる。

三ヶ月の間、現在のように誰にも気づかれぬように過ごした。もちろん、姉にだけは絶対に知られないように注意していた。

しかし姉の目をいつもでも誤魔化せはしなかった。それに、その時分の相手は幼く、それにあまり頭の良い方でもなく、目立つ場所に傷を付けられてしまっていたからだ。

母親を失ってから、自分がその代わりになることを誓った姉の怒りは大きく、凄まじかった。

まだ高校生の初音が、その親に文句をつけても埒が明かないと判断したのだろう。

初音は貴夜に暴力を振るっていた本人に、直接的な『抗議』をし
たらしいのだ。

その現場を貴夜が目撃したわけではない。だからその内容はさっぱりわからないが、イジメグループの連中は、貴夜を見ると恐怖の表情で、まるで逃げるみたいにしてに去って行くようになった。

一応それで貴夜の生活に平穩が訪れたのだが、ありがたくない噂も広まってしまったのも事実である。

「ちょっと、そんなんだからってどう言う意味よ？」

初音は剥れたような顔で問う。

「い、いや　だからさ、ぼくが自分で決着をつけようと考えていたんだ。それに、顕人だってぼくを助けてくれるんだ。今日は偶々一人のところを狙われてしまったんだよ」

「そう……。顕人は知っているのね？」

「ああ、そうだよ」

そう貴夜が答えると、初音は眉を顰めるようにして、疑惑の視線を貴夜に向けた。

「　まあ、いいわ。で、そいつらの名前は？　それにこの二人は
どう関係しているの？」

真正面から姉に切り込まれ、貴夜はまたもや言葉に詰まる。

苦し紛れの告白に、それ以上の整合性を作り上げるのは難しく、
瞬時に答えることができないのだ。

その時であった。天の助けが意外な人物から降りてきた。

「相手が誰であるかは存じませんが、彼は複数の男に襲われていました。その折に私達を通りかかり、あなたの弟を救い出したのです。そしてその際、私達はパスポートと手持ちの荷を失ってしまったのです。そこであなたの弟がこの家に招待してくれたのです」

いままでは沈黙を守っていたシエラが、淡々と、そして論理的に初音の問いに対して答えたのだ。

初音はその声の主を啞然とした顔で凝視している。

シエラの外見は、どう見てもまだ十歳に満たないであろう子供である。そのいたいけな少女が、整然とした言葉で初音に答えたのだ。初音が戸惑うのも仕方がないことであった。

「あなた」

「私はシエラと申します」

初音が問いかけようとすると、先回りしてシエラは短く答えた。

「そ、そう。　　ところであなた、年は幾つなの？」

「あなたが思うほど幼くはありません」

「確かに　　ね。でも……」

初音はそこで言葉を切ると、わずかに俯いて小さく溜め息を吐いた。

「まあ、いいわ。今夜はもう遅いことだし、いまから出て行けとも

言えないわね。取りあえずあなた達の泊まれる部屋を用意するわ」

「えっ！ いいのかい？」

「こつも簡単に姉がそれを許すとは思わなかった貴夜は、思わずそう訊き返した。

「仕方ないでしょ。こんな夜更けに小さな女の子を放り出すなんて、そこまでわたしは冷たい女じゃないわ」

「それは感謝いたします」

人形のように愛らしい、それでいて平板な表情のまま、シエラは厳かにそう言って深々と頭を下げた。

「別にいいのよ。部屋はいくらでも余っているのだから」

初音は穏やかな微笑を浮かべ、そう告げた。リーゼロッテに対しての態度とは、まったくと言っていいほど正反対のものだった。

「さあ、ミレディもこの方に感謝を」

シエラは静かな声で促した。

「え？ なぜ？」

リーゼロッテは驚いたような顔をした。

「だって わたしとタカヤはファイフティー・ファイフティーの関係でしょう？ わたしはタカヤを護り、そして至高の位に導く師匠なのよ。それに対して住居を提供するのはあたりまえじゃないの」

「ミレディ。この家の主人はタカヤではありませんよ。だからあなたは、ハツネに感謝の意を示す必要があるのです」

冷たく言い放つシエラの声に、リーゼロッテは反抗的に見返したが、やがてシエラの澄んだ水色の瞳に気圧されたかの如く、その視線を逸らした。

「わたし達を受け入れて頂いて感謝いたします。レディ・ハツネ」

リーゼロッテはドレスの裾を軽く引き、優雅に一礼して見せた。そして艶やかな微笑みを浮かべる。

先ほどのわがままな少女のような態度とは一変し、まるで貴族の令嬢の如き優雅さと、華やかな気品を醸し出しているリーゼロッテを見て、初音でさえ感嘆の吐息を漏らす。

「これでいいかしら？」

リーゼロッテはシエラを横目で見てそう言った。

「大変宜しいですよ。あなたは『貴族』なので、礼儀は非常に大切です」

シエラは相変わらず淡々とした声で頷いた。

「あなた達はどう言う関係なの？ どうも姉妹ではなさそうだけれど……」

初音は細い頤に手を当て、訝しむように二人を見やった。

「リーゼロット様は私の主人です。私はミレディの従者なのです」

「主人？ あなたそんなに小さいのに……」

初音は複雑な表情を浮かべ、シエラをじっと見つめた。

「あなたも大変なのね。まあ、いいわ。貴夜とどのような関係なのか、もっと詳しく聞きたいところでもあるし……。とにかく部屋の用意をしましょう」

初音はそう言って貴夜の方に視線を向けた。

「貴夜にもきちんと説明してもらおうよ」

貴夜はどこか絶望的な予感を覚え、ただ頷くだけだった。

日常

貴夜が教室に入るなり、親友であり唯一の友である神代顕人は、顔を強張らせたままこちらに向かつてきた。そして無言で貴夜の腕を掴むと、押し殺した声で

「ちょっと来い」

と言って、教室の最後列の窓際　　貴夜の席だった　　に引き摺って行く。

「おい、なんだよ？　腕が痛いよ」

貴夜の文句にも、顕人は無言でそのまま進み続ける。苛立ったようなその様子は、明らかに貴夜の言葉を無視している。

そんな二人の姿を、クラスメート達は様々な目で注視していた。

多くの女生徒は嫉妬と羨望、そしてどこか嬉しそうな目で……。

多くの男子生徒はそれに対して苦々しさを隠さない。

神代顕人は背が高く、そして逞しい四肢を有する美男子だ。茶色っぽい長髪に浅黒い肌。そして栗色の澄んだ瞳を持つ、貴夜とは違った意味で目立つ存在だった。ワイルドでありながらも知性を感じるその容姿に、女生徒はもちろん、男子生徒からも人気がある男だった。

女生徒の人気を二分する二人の少年に、教室の生徒達のほとんど

が注目している。

「おい、わかったから、いいから放してくれよ」

教室内の雰囲気を探して、貴夜は顕人に囁いた。だが顕人はそれに答える様子も見せず、黙って貴夜を椅子に座らせる。まだその手は貴夜の右腕を握ったままだ。

「昨日、俺と別れてからなにがあった？」

そう問い掛ける顕人の声は低く、怒りと苛立ちを必死で押さえているような、抑揚のない口調だった。

「べ、別ににも なにもなかったよ」

それは明らかに、なにもなかったような態度ではなかった。

貴夜は嘘が下手な人間ではない。それどころか、涼しい顔で己の心を偽る天才であった。自分さえも欺くその演技力は、演劇部にスカウトされないことが不思議なほどでもあった。

だが、この長年の親友に対しては、いつもその演技力を行使することができない貴夜であったのだ。

「なにもないってことはないだろ？ それじゃ」

顕人はいきなり制服のブレザーの袖を捲り上げ、

「この痣はなんだよ？ 昨日はこんなもの、ついていなかったぞ」

と、鋭い目で睨みつける。

切れ長の涼しげなその眼に、剣呑な輝きが宿っているのを、貴夜は見逃さなかった。

「そ、それは……」

口籠もった貴夜の心を読んでいるのか、顕人は相変わらず怒りを抑えた為に、不自然に淡々とした声で、

「中根達の仕業なんだろう？ いい加減におまえも強情を張るな」と、貴夜以外には聞えないように呟いた。

「それは どういう意味なんだ？」

そう訊きながらも貴夜にはわかっている。顕人の言葉の意味を……。

顕人が語る貴夜の強情と言つのがなにかは、貴夜自身が良く知っているのだ。

「わかってるだろ？ 俺だっていままで我慢したんだ」

そう答えた顕人は、おもむろに踵を返すと、教室の出口に向かって歩き出した。その鬼気迫る圧力に、クラスメート達は思わず後退りして道を開ける。

顕人が向かう場所がどこであるのか、貴夜はすぐに理解した。顕人は中根達のクラスに向かおうとしているのだ。そしてどうするの

かは明らかだった。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！」

貴夜は慌てて顕人に追いつがり、その腕を縋りつくようにして掴んだ。

頭一つ分背の高い顕人は、貴夜の目を覗き込むようにして見つめる。そして穏やかだが不転の意思を秘めた、静かな声で語りだした。

「いい加減にしろ。いままでおまえが言う通りに黙っていたんだ。おまえは確かに意志が強い。人に迷惑を掛けないとか、卑怯な真似をしたくはないとか、そんなおまえの気持ちは理解できないけれど知ってはいた。でもな……。」

おまえ、俺達の気持ちはわかっているのか？ おまえが痛めつけられて、その身体の見えない所に傷つけるのを知っていて、だけど手出ししないでくれと言われている俺の気持ちを。おまえは理解しているのか？」

顕人の敵かとも言えるほど静かな声を聞き、貴夜はなにも答えることができない。

考えてみれば、貴夜の訴えは顕人にとって、失礼で尚且つ酷いものだったのかも知れない。立場が逆であったなら、貴夜はもどかさのあまり、気が狂いそうになっていたかも知れないのだ。

それだけ貴夜は顕人を大事に思っていた。つまりそれは、顕人にも当て嵌まることなのだ。

「それに、いまはまだ人目のない場所で、ただ小突かれたりしているだけかも知れないが、それだけにエスカレートした場合、誰もそれを止める者がいないと言うこともあるんだ。それだって俺は心配なんだぜ」

貴夜は素直に自分を恥じた。

顕人の語る言葉は、いままで我慢を重ねた結果なのだ。それに、貴夜自身ならば守れない約束を、いまのいままで守ってくれていたのだ。

自分と顕人との関係を考えてみると、貴夜が顕人に強いたものは、あまりにも一方的なわがままなものだったに違いない。

だがしかし……。

まだ譲れない。自分自身が行動もせず、ただ顕人に行動を起こさせるわけにはいかない。

「ごめん。でも、もう少しだけ待ってくれよ。まだ僕は動いていない。おまえにすべて投げ出したりはできないんだ」

見上げるその目に譲れぬ信念を浮かばせ、貴夜はじつと見つめ返す。

顕人はやがて諦めたように溜め息を吐いた。

「わかったよ。でも次はないからな。もし今度、おまえがおなじ目に遭ったのなら、その時は……」

「だいじょうぶ。ぼくだってやる時はやるのさ」

わずかに微笑みを浮かべ、貴夜は自分の胸を拳で叩いた。

「でも、もしぼくがしくじったなら……」

貴夜はわずかに頬を歪め、情けなさそうな顔をして、

「 頭人の好きにしていよいよ。頼りになるのはおまえだけだからな」と呟いた。

頭人も瞳の輝きを柔らかくし、「オーケー。了解した」と返した。やけに嬉しそうな表情で頷いた。

次の瞬間、息を潜めていた教室内の生徒達の間、ホツとしたような穏やかな空気が流れ始めた。

誰もが二人の様子を窺っていたのだ。

「本当にあんたらは仲がいいねえ。でも誤解を受けるような言動は、二人だけの時にしたらどうなのさ」

呆れたような声が二人の背後から掛けられた。

声の主は飯塚沙樹。

このクラスでは数少ない貴夜の友人の一人であった。

沙樹は錆色の 染めるんだったらもっと綺麗な、もうすこし地味な色にすればいいのにといつも貴夜は思っている 髪をポニ

「テールにし、背の高いしなやかな感じのする少女だった。わずかに吊り上がり気味の目で、貴夜と顕人を交互に見ている。」

「なんだよ、誤解の受けるような言動つてのは？」

沙樹はわざとらしい溜め息を吐き、やれやれと言った表情を浮かべた。

「それって天然？ それともわざとそう見せてんの？ まるであんたらだつたら、どこぞのバカツプルみたいだよ。人前で痴話喧嘩なんてして。怪しい関係に見られても仕方ないんじゃないの？」

「な、なんだよ！ おまえまでぼくらをホモ扱いするのか？」

貴夜の声は裏返っていた。顔が熱くなっているのも自覚している。

「気にするなよ。みんな焼いているのさ。俺達の間係を、な」

顕人はニヤニヤとした笑みを浮かべて、まるで挑発するように沙樹を見つめた。いつの間にか右腕を貴夜の首に回している。

沙樹は一瞬、微妙な表情をしてわずかに顔を赤らめた。

「バカ！ あんたはいいけど、貴夜に迷惑になるだろ！」

「へえ、そうなのか？」

揶揄するような笑みで沙樹に問う顕人。

「ふざけるのもいい加減にして！」

沙樹の目がさらに吊り上がり、剣呑な光を放ち始める。だがその奥には、微かな羞恥の色が顕われていた。

「わかった、わかった。軽い冗談にそんなに本気になるなよ」

顕人はそう言って貴夜の首に回した右腕を降ろす。

「冗談も過ぎると笑えないんだよ！　愛莉もそう思うだろ？」

忌々しげに吐き捨てると、沙樹は同意を求めるように後ろを振り返った。

そこには東條愛莉（トウジョウアイリ）が困ったような顔で微笑んでいた。

愛莉は色白の、おとなしい外観とそれに似合った性格の少女だった。背中まである漆黒の長い髪が美しい、良家のお嬢様と言った風情の愛らしい少女だ。

沙樹とは古くからの友人であるが、外見も性格も、まったく言っていないほど正反対の二人であるのに、どうしてそれほど仲が良いのか、二人を知る者はみんな不思議に思っている。

もっともそれは、貴夜と顕人にも当て嵌まるのだが……。

「そうね。でも、桐生君と神代君なら仕方ないのじゃないかしら？」

柔らかい笑みを崩さぬまま、愛莉は控えめにそう答えた。

「仕方ない？」

目を瞬かせ、信じられないと言ったように貴夜は呟く。

「仕方ないってなんだよ……。まさか東條までそんなことを……」

貴夜は疲れたような声でそう言つと、深い溜め息を漏らした。

「ちが、違うわ。わ、わたしは別にそんな意味じゃ」

愛莉は慌てて小さく手を振って否定した。

「わかつてるよ。冗談だよ」

貴夜がそう言つて微笑むと、愛莉はホツとしたように笑みを浮かべた。

「だって二人とも仲が良すぎるんだもの……」

「そつだよ。ちょっと妖しい雰囲気があるって！」

そう言つて沙樹は大きく頷いた。

「別にいいじゃないか。俺達はガキの頃からの親友なんだ。これくらいはおかしくないだろうさ。それよりもう席に座れ。そろそろセンセイが来るぞ」

頭人はそう言つて自分の席に戻った。

貴夜も安堵の吐息を漏らし、まだ感じる複数の視線を無視して自分の席に戻った。

「ちよつと、貴夜」

沙樹が隣の席　もちろん沙樹自身の席だ　から声を掛けてきた。

「うん？　なんだよ？」

「あれだけ神代が怒ったってことは、またあんた、あいつらにやられたの？」

沙樹は身を乗り出すようにして、心配そうな表情で囁いた。なるべく他人には聞かせたくないと言う配慮だろう。

沙樹は実際、貴夜の知る少女の中でも非常に優しい少女だと知っている。派手な外見と乱暴な言動の所為で誤解を受けやすいが、すくなくとも貴夜はそれを知っていた。

中学時代から沙樹には世話になりつ放しだった貴夜にはわかっているのだ。

「大丈夫だよ。心配しないでよ」

「あんたネエ、大丈夫大丈夫って、いつもそれだけじゃないの。まあ、いざとなれば神代が出張るんだろけど……。でも、あんまり愛莉に心配かけないでよ」

沙樹の言葉に貴夜は思わず笑みを浮かべそうになった。愛莉に転嫁しているが、沙樹自身がそれだけ心配しているのだろう。

もつとも、そんな風に言えば、沙樹は絶対に認めないだろうが。

「ああ、わかったよ。今度から上手くやるさ」

沙樹に向けて真剣な顔で答える。そして小さくありがとうと呟き、貴夜は心からの微笑を浮かべた。

「そ、それならいいのよ」

沙樹は顔を赤らめながら前を向いた。

『七主』

朝はやはり調子が出ない。それはリーゼロッテが『闇の種族』であるからには仕方がないことだったが、それでも『七主』である彼女は、普通の人間とそう変わらずに活動できる。苦手ではあるが、無力になってしまっわけではない。

朝に弱い人間とそう変わらないとも言える。しかし倦怠感拭いきれず、寝起きは最悪に近い。もっとも夜に寝る『主』と言つのも珍しいのだが……。

初音に呼ばれて階下に降りると、ダイニングのテーブルには様々な料理が用意されていた。すでにシエラはテーブルの席に着いていた。

「おはようございます、ミレディ」

シエラは椅子から立ち上がり、深々と頭を下げた。

「おはようシエラ　それにハツネ」

リーゼロッテはテーブルに近づきながら、キッチンから新たな料理を持ってきた初音に目を向けた。

「おはよう。良く眠れたようね」

皿をテーブルに置きながら、横目で初音はリーゼロッテを確認しながらそう言った。

「ええ、良く眠れたわ。もっとも、タカヤと一緒に部屋だったなら、もっと良く眠れたでしょうけれど」

天使のような微笑みを浮かべて、リーゼロッテは挑むようにそう返した。

「品がないことを言わない方がいいわよ」

「あら、そんな意味で言ったわけではないわ。ただタカヤを護るにはおなじ部屋で休んだ方がいいと思っただけですもの」

リーゼロッテの平然とした言葉に、初音は苦々しい顔で睨みつける。だがすぐに、微笑を浮かべ続けるリーゼロッテに呆れ、小さく肩を竦めた。

「もういいわ。それより早く食べてちょうだい。せっかく温めたのに冷めてしまうわよ」

「ええ、いただくわ」

リーゼロッテはシェラの横に座り、テーブルの上にある朝食を見て目を輝かせた。

「おいしそうだわ」

「どうぞ。飲み物は紅茶とミルク、どちらがいいかしら？」

「ハツネが淹れてくれるのならなんでもいいわ」

リーゼロッテの言葉を聞いた初音は、ポットから紅茶を注いだ力

ツプをリーゼロッテに手渡した。もちろんティーバッグではなく、茶葉から抽出したものである。いつもはクイーンメリーとオレンジ・ペコの二種類を好んでいる初音は、今朝は特別のダージリンを使っていた。

初音が自分の紅茶を味わいながら、リーゼロッテの食事を眺めていると、その美しい少女は実にいい顔をして料理を口に運んだ。

スクランブルエッグにカリカリに焼いたベーコン、そしてラタトゥイユとヨーグルトサラダ、パンは昨日の内にパン焼き機にセットしておいたものだ。

一口頬張るごとに、見ている初音がつい微笑を漏らすほど、実に幸せそうな顔をする。

「ハツネの料理は本当に素晴らしいわ」

非常に速いスピードで、かつがついているとは見えせず、それどころか上品とさえ言える食べ方だった。そんなことができるのはリーゼロッテだけだろう。

「それはありがとう」

惜しめない賞賛の声に、戸惑いながらも初音はそう答えた。

「昨夜のシチューもそうだったけれど、ハツネの作る料理には愛情が溢れているわ。久しぶりに満足できる食事だったもの」

初音は嬉しさと懐疑の入り混じった、微妙な笑顔を浮かべる。

「申し訳ありません。私の料理ではミレディは満足されませんかからね」

ミルクを啜っていたシエラが、平板な口調で呟いた。

「まあ、そんなこと　あるけど。でも、それはシエラが悪いんじゃないわ」

そう言ってリーゼロッテは無邪気に微笑む。

二人が食事を終える頃を見計らい、初音は改まった口調で重々しく口を開いた。

「さて。そろそろあなた達の目的について教えてもらいましょうか」

リーゼロッテは笑顔を崩さぬまま、

「目的とはなにかしら？」と、紅茶を一口啜った。

初音は片方の眉を吊り上げ、苛立ちを押さえた平板な口調で続けた。

「ふざけないで。あなたがこの街にやって来た目的よ。まさか貴夜を、あなたの『血族』にするつもりではないでしょうね？　『七主』であるあなたが、そんなことの為にわざわざやって来るなんてあり得ないわ」

リーゼロッテはそこで微笑を引っ込めると、胡乱な顔つきで初音を凝視した。

「そんなことを知っているとは、あなたもただの人間ではないのね

「？」

「わたしは人間よ。すくなくともあなた達よりは人に近いものだわ。けっして『闇の種族』の一員ではないわ」

「なるほど。ではわたしが『七主』の一人であることを知り、『闇の種族』と言う存在を知るあなたは、いったい何者なのかしら？」

リーゼロッテは落ち着いた表情にわずかな笑みを浮かべ、初音の目をその不思議な色合いの瞳でじっと見つめた。青と赤の輝きが増していく。

「私に『魔眼』は効かないわ。だからそれは止めてちょうだい」

ぴしゃりと初音がそう告げると、リーゼロッテの瞳から妖しい輝きは消えた。

「それじゃあ、素直に教えなさいよ」

リーゼロッテがむくれたような声でそう言うと、すかさず横合いから、諭すような声でシエラが語りかけた。

「はしたないですよ、ミレディ。ハツネはこの国の『血族』なのでしよう。あなたの目的を話し、協力を仰いだ方が得策ですよ。それに」

初音は「違うわ」とシエラの言葉を遮った。

「私はこの国の退魔師　『鬼』を封じる役目を持った人間よ。あ

なた達の言う『血族』ではないの。逆にそれを屠る者よ」

「なあに？ それじゃあ、『教会』とおなじ連中なの？」

リーゼロッテはどこか哀しげにそう呟いた。その目に敵意は湧いていないのを確認して、初音はその呟きのような問いに答えた。

「それも違うわ。あなたが言う『教会』はこの日本ではその活動を許されていないの。この国には元々、『闇の種族』ダーク・レイスに対抗するべき組織があつたから、協力関係にはあつても、『教会』のように特定の相手を脅威として殲滅しようとは考えていない。

私の一族はその組織の一つなのよ。だからあなたのことを知ってはいても、別に敵対しようとは思わないわ。それに、『七主』相手にそう考える愚か者でもないもの」

苦い思いを押し殺して、見た目は平然とした表情で初音は語った。

「ふうん、そうなの。まあいいわ」

リーゼロッテは詰まらなそうにそう呟き、空になつたカップの底を覗き込んだ。

すかさず初音はポットを取り上げ、そのカップに新たな紅茶を注いだ。

「ありがとう」

リーゼロッテはまさに華のような笑顔を見せた。その愛らしい笑顔は、けっして『闇の主』と呼ばれる陰性の存在が見せるものではない。

「それではタカヤもあなたとおなじ存在なのですか？ この国の『鬼狩師』 『闇の種族』を狩る者をそう呼ぶのですね 一族のことは、私もあの方から聞いております。『真皇寺』に『九凱』そして『桐生』の三つの家名を。その中で桐生一族が日本の『主』の末であることも知っております」

突然語りだしたシエラの平板な声に、初音は思わずはっとしたような表情で振り向いた。

「なぜあなたがそれを……？」

「私達はヨーロッパを根城にしていますが、この国の知識と情報は十七年前から収集していたのです。特に『鬼』と呼ばれている『闇の種族』と、それを狩り出している『鬼狩師』の存在について、重点的に調査しておりました」

淡々と答える幼い少女を、初音はじつと凝視していた。そして冷たく響く硬い声で、

「それでは貴夜のことも調べていたのね？ そうなんですよ？」

と、鋭く問い詰めた。

「いいえ。それは違います。私が調査したのは、この国においてのあの方の行動を追う為であり、それに付随してあなた方の一族を知っただけです。タカヤの存在は昨夜の遭遇で初めて知りました。決してタカヤが目的でこの国にやってきたわけでは在りません」

「そ、そうなの……？」

初音はまだ納得がいけないと言った表情で、さらに質問を続けた。すでに問い掛ける相手はリーゼロッテではなく、幼い少女の姿を持つシエラであった。

恐らくは シエラも『血族』であるのだろう。しかも数百年を経た『エルダー』だ。すくなくとも初音はそう考えていた。

「それではあなた達の目的と言うのは貴夜ではないのね？ 『あの方』とか言う存在なのね？」

初音の声は明らかに安堵の響きを帯びていた。

「ええ、その通りです。それでは先ほどの問いに答えてくださいませんか？ タカヤはあなたとおなじ存在 退魔の一族としての能力を持ち、『鬼狩師』として」

「違うわ！ 貴夜は違うの。それにあの子はなにも知らないのよ」

慌てて答える初音の態度に、シエラは感情の顕われないアイス・ブルーの瞳を向ける。

「そうですね……」

そう呟き、シエラは自分のミルクを一口飲んだ。

懐疑的な調子でもない呟きであったが、その答えにシエラが納得していないと感じ、初音は話の筋を変えるために次の質問をぶつけた。

「でも あの方と言うのはいったい何者なの？」

急な初音の問いに、しばらくしてからシエラは口を開いた。

「あの方は 『原初の王』 であり 『真の王』 と呼ばれているお方です。前史より存在する、人が生まれたと同時に誕生した 『闇の種族』 の祖であるお方です」

シエラの答えを聞き、初音は思わずカップをその指から落としてしまった。テーブルにぶつかつた白磁のカップは、澄んだ音を立てていくつかの大きな欠片になる。

「それって 『鬼』 の祖 『真祖』 のことなの……？」

震える声で呟くように訊ねる初音の瞳には、明らかな恐怖と不信感が滲み出ていた。

『真祖』 とは伝承に過ぎないものだとか初音は聞いていた。『鬼』 は人から生まれ出るが、それは多分に偶発的な条件下で誕生するものだ。『祖』 などと言う存在があり、それが 『鬼』 を 彼らの言う 『闇の種族』 を生み出した原因であるとは考えられていない。

まさに 『魔の神』 とも呼べる超越的な 『鬼』 。そんなものが存在しているとは考えられない。在り得ない いや、在ってはならない存在だ。

すくなくとも初音の信じる真実には、 『真祖』 など存在しない。

「ハツネは信じていないみたいよ」

いままで沈黙していたリーゼロッテが、詰まらなそうな声でそう言った。

「ついでにわたしもハツネの言葉を信じていないわ」

辛辣な口調でリーゼロッテは初音を睨みつけている。その瞳は初音の一挙手一投足を見逃さぬように、鋭い視線を送ってきていた。

「な、なにを信用しないと云うのよ!」

思わず立ち上がりながら、初音はリーゼロッテを睨み返した。

リーゼロッテは初音の視線を柳と風に受け流し、涼しい顔をして初音を見つめている。

「シエラの答えを信用していないでしょ？ でもあの方が『教会』が決定した『真王』であるのは間違いないわ。なんと云っても、わたしはあの方に育てられたのだから。」

ハツネは『七主』と言うものがどういう意味で名づけられたか知らないのね？ あの方自身が発見し、育て上げた『主』のことをそう『教会』は呼んでいるのよ。だからそれは紛れもない事実なの。わたしがそう云うのだから間違いないわ」

そこで一旦、リーゼロッテは言葉を切った。そして驚愕に目を見開き、そしてすぐに眉を顰めた初音に向けて、あらためて言葉を続けた。

「それに、タカヤが『主』の素養を持っているのをハツネは知

っているはずよ。それがあなたの家系に連なる者の常であるのかはわからないけれど、タカヤもまた普通の人間ではない。ハツネはそれを知っていて、タカヤが普通の人間だと、なにも知らないのだとわたし達に言ったわ」

リーゼロッテの口調は、決して責めるような響きを伴っていない。それどころか唇には悪戯っぽい微笑を湛え、愉しくて仕方がないと言った響きを含んでいる。

「だからと言って嘘ではないわ。貴夜は実際になにも知らない。桐生の家のことも、自分がどのような存在であるかも、まったく知らないで生きて来たのよ。あなた方が現われるまではね」

なんとなく自分の心の奥を見透かされ、それを揶揄されているような気分になり、初音の返す言葉は刺々しいものになった。

「あら？ それは心外だわハツネ。もうあなたにはわかっていてでしょうけれど、タカヤが昨晚話したことは嘘よ。タカヤが襲われたのは人間ではないの。旧き血筋の『血族』、それが貴夜の血の特殊性に気づき、その魂を手に入れる為に貴夜を狙っているのよ。それをわたしが救い出し、そして守って上げると言っているのよ」

リーゼロッテが相変わらず愉しそうな声で答えると、初音は驚きの形に口を開いたまま、しばらくの間声も出せない状態になってしまった。

「な、なんですって?」

ようやく口から発せられた声は、驚愕に裏返ってしまっていた。

「け 『血族』ですって?」

「そうよ。最近この街を騒がしている、連続通り魔殺人の真犯人がその『血族』なの。そしてその『血族』の目的が」

「貴夜だと言うの?」

初音の声は緊張に震えていた。

「まあ そうだとも言えるし、違うとも言えるわね」

「それは どう言う意味?」

困惑したような初音の声に、

「タカヤが真の目的と言うわけではないのです」と、シエラが平板な声で答えた。

「あの血族の目的は己が自己存在の強化であり、力有る者のすべてを奪うことにより、高位の『闇の主』ダイク・ローフの道を辿ることです。いずれは『真王』であるあの方を凌駕し、その存在を自らに置き換えること。それが終局的な望みでしょう。」

タカヤは力有る者です。潜在的に有する霊的な力は、『主』の中でもかなりの高位に位置するでしょう。その力を奪うために、彼の『血族』はタカヤを狙っているのです」

落ち着いた声で事も無げに語るシエラの顔を、初音はじつと凝視していた。

「それじゃあ、貴夜はメインディッシュの前の前菜と言ったところなのかしら?」

初音の声は怒りを通り越したのか、どこか無機的なものになっていた。

「冗談じゃないわ！ 貴夜は桐生の人間よ！ 私の 『斬幽』の『鬼斬り』であるこの私の弟なのよ！ 『血族』だか『闇の貴族』だか知らないけれど、貴夜に手を出す連中はこの私が滅殺してあげるわ！」

いきなり爆発した初音は、その切れ長の目に鬼火のような輝きを宿し、まるで目の前の二人がその仇のように睨みつける。

緩やかにウェーブした長い神が、ざわざわとうねり始める。

涼やかに微笑んだリーゼロッテは、本来は敵になるはずの『鬼斬り』に対して、

「やだわ、落ち着いてよハツネ」と、穏やかに声を掛けた。途端に我に帰った初音の目から、奇妙な輝きは消える。

「わたし達はそのためにここに居るのよ。あなたがどれほど力を持つ退魔師かわからないけれど、あの『オーガ』を相手にするのは難しいわ。なんと言っても、アレは特別な血脈の『血族』ですもの。でもわたしなら、あの『オーガ』を撃退することができる。それは信じてもらえるでしょ？」

初音は暫し動揺する。だがそれも仕方がないだろう。

なんと言っても、本来は敵対すべき『鬼』が、しかも最強レベルの『闇の種族』である『七主』の一人が、最愛の弟を護ると宣言したのだ。

通常なら信用できる言葉ではない。

だがこの少女は　　。

なぜかりーゼロツテは、初音にとって信頼に足る存在に思えていた。

「わかったわ。いまのところ、あなたを信じましょう。でもなぜ、あなたは貴夜を護ってくれるの？　あなた達の目的は『真祖』を探すことなのでしょう？」

「あの方はそう見つかるものではないの。でも、貴夜にはあの方の痕跡があるから、貴夜と一緒に居れば、なにか手掛かりが得られるかも知れないのよ。それに……。」

貴夜が『主』^{ローテ}の資格を持つ人間ならば、わたしが導き、育て上げなければならぬのよ。それがあの方の望みなのだから……。」

そこでりーゼロツテは、初めて見るような愁いを帯びた微笑みを浮かべた。

初音の胸がなにやら締めつけられる。この儚げなで、この世のものとは思えぬ美しい外見の、そして実に堂々としたもの言いの誇り高いこの少女に、哀れみと愛情が湧きあがるのを抑えることができないでいた。

「　　ところだね、あの包みはいつたいなにかしら？」

いきなり屈託のない声でリーゼロッテは問い掛けた。そしてリーゼロッテ指差したものを見て、初音は思わず声を張り上げた。

「ああ、もう！ 貴夜ったらまたお弁当を忘れてるわ！」

「お弁当？ それじゃあ、貴夜はランチを食べられないの？」

リーゼロッテは妙に驚いた顔でそう訊ねた。

「いえ まあ、そんなことはないわ。購買だってあるのだから、食べるものは買えるでしょう」

「でもそれはハツネの料理ではないわ」

そう呟くリーゼロッテの声は、妙に真剣なものであった。

「わたしが届けに行くわ」

「えっ？」

初音は驚きのあまり、思わず言葉を失った。

「だからもう少し その 量を大目にしてくれない？」

わずかにはにかみながら、リーゼロッテは微笑む。

「だってわたしも一緒に食べるんですもの」

初音はリーゼロッテの笑顔に釣られるように笑みを漏らした。そ

して急に真顔になり、

「もう真昼よ。それに今日は特に日差しが強いけど、大丈夫なの？」
と、訊ねた。

「わたしは『主』^{ロード}なのよ。確かに調子は良くないでしょうけど、普通の人間のように行動するぐらいは問題ないの」

リーゼロッテは朗らかな笑顔で答えた。

「わかったわ。それじゃ、もう少し料理を作ってあげるから、お茶でも飲んで待っていて」

初音はそう言ってキッチンに向かった。

冷蔵庫の扉を開き、新たな食材を取り出している時、ふと初音は考えた。

リーゼロッテは本当に『闇の種族』らしくない。もしかしたのなら、初音以上に人間らしい感性を持っているかも知れない。

『七主』ともなれば、その力は神か悪魔の如き超越的なものだろうのに……。

無邪気にさえ見えるリーゼロッテの態度に、初音は戸惑いながらも惹かれていると、いまはつきりと認めた。

変容する日常

四時限目の終了を告げるチャイムが鳴り終わると、すぐに生徒達はがやがやと騒がしく、慌しくなった。

教室を出て行く者、中の良いグループで固まるために机を移動し始める者、昼休みの教室は活気に満ちている。

「どうする？ もちろん貴夜は今日もお弁当なんでしょ？ 今日はず日もいいし屋上にも行く？」

あたりまえのように沙樹が声を掛けてきたが、貴夜は自分のスポーツバッグを漁った後、「忘れたみたいだ」と、呟いた。

昨夜はほとんど眠れなかった所為で、いつもより寝坊してしまった。だから慌しく家を出る際、弁当を鞆に入れるのを忘れてしまったのだらう。

（ああ、また初ネエに怒られるなあ……）

弁当がなくても購買に行けばパンぐらいある。とは言え、やはり姉の手作り弁当が味わえないのは残念だった。

「え〜？ なによ、初音さんのお弁当、今日はないって言うの？」

沙樹は露骨にがっかりしたような声と表情で、不満を貴夜にぶつけた。

初音はいつも、貴夜の友人達の分をまかなえるほどの料理を、ぎ

つちり詰め込んだランチボックスを用意していたのだ。一年前にその味を褒められ、気を良くした初音は毎日朝早く起き、貴夜のランチを腕によりを掛けて作り上げる。

だから沙樹達もそれを、毎日心待ちにしているのだ。

「仕方ないだろ。誰だつてうっかりすることはあるんだよ」

顕人は不満げな沙樹に対して諭すようにそう言った。

「そうよ。今日はわたし達が桐生君にご馳走しないと」

愛莉が取り成すように沙樹に微笑んだ。

「仕方ないなあ。あゝあ、今日は初音さんの料理を食べられないのかあ。すつごく残念だわ。学校に来る最大の楽しみなのになあ」

天を仰いで大袈裟に嘆息した沙樹は、ふと窓の外に目を向けると、その目を疑うように眉を顰めてじつとなにかを凝視した。

「なにしてんだ？」

顕人がそんな沙樹の様子に、訝しげに声を掛けた。

「この学校に留学生が来るなんて 聞いてないわよね？」

「はあ？ 留学生だあ？」

呆れたような声で顕人がそう言うと、沙樹がむっとした声で、

「だっていま、金髪の女の子が校舎に入ったのを見たんだもの」と、言い返す。

(金髪の女の子……?)

貴夜はなんとなく厭な予感がした。そしてそれは、得てして良く当たるのだった。

「と、とにかく早く屋上に行こうよ」

貴夜はそう言って教室を出ようとした。

「おい、待てよ。なにをそんなに急いでるんだ？」

「いいから早く行こうよ！」

そう言い捨てて廊下に出た瞬間、貴夜は異様な光景を目撃することになった。

廊下にいた生徒達は、全員が揃って立止まり、一方をじっと凝視していた。

沈黙が舞い降り、廊下の中央にいた人間は慌てて壁際に後退する。

生徒の海が分かれ、その中央を軽やかに進んできた美しい金髪の少女を確認して、貴夜は思わず呻いてしまう。

白いシンプルなワンピースに、鮮やかな金糸の豊かな髪。そこに飾られた水色のリボン。映画のワンシーンを切り取ったかのようなその姿は、日常とは切り離された鮮やかな風景であった。

「タカヤ！」

貴夜の姿を認識した金髪の少女　リーゼロッテは、嬉しそうに貴夜の名を呼ぶ

と、弾むような足取りで近づいて来た。その美しい顔に魅力的な笑顔を浮かべる。

「はい、忘れ物よ。どうやら時間には間に合ったみたいね」

と、大きなバッグを前に突き出した。

「なにしに来たんだよ？　　なんだい、それは？」

「あら、随分なもの言いね。せつかくこのわたしが忘れ物を届けに来て上げたのに」

受け取ったバッグは妙に重かった。

「忘れ物って　　弁当のことじゃないのかい？」

「そうよ。それ以外のなんだと思つたよ」

「いや、それにしても大きいし、妙に重いんだけど……」

「わたしの分も入っているのよ。さあ、早く行きましょう」

リーゼロッテはそう言うと言いつつ貴夜の右手を掴み、屋上に向かう階段へと歩き出した。

「ちよ、ちよっと、どこに向かっているんだよ？」

貴夜は引き摺られながら、小柄な美少女へと囁く。いまさらではあるが、貴夜とリーゼロッテの二人は、周囲の人間に思い切り注目を浴びていたので、大きな声で問い掛けることができなかつたのだ。

「あなたは屋上に向かおうとしていたのではなくて？」

「そ、そうだけど……？ でもなんで君がそれを知っているんだ？ それに屋上に向かうルートをどうして知っているんだよ」

「そんなのあたりまえじゃない」

リーゼロッテは悪戯っぽく微笑む。

「わたしが誰だかいい加減に理解しなさいよ」

いつもとは違い、どこか重苦しい食事だった。

沙樹や愛莉はもちろん、顕人でさえほとんど会話らしい会話もなく、黙々と料理を口に運ぶだけだった。

ただ訝しげな視線をリーゼロッテと貴夜の二人に向けながら……。

リーゼロッテについて根掘り葉掘り訊ねられることを覚悟していたが、なぜか誰もそれに触れようとはしなかった。ただ胡乱に、そ

して不安そうな目で、貴夜とリーゼロッテを交互に眺めているだけだった。

貴夜もリーゼロッテについては簡単に説明できないことから、特別に彼女のことを話はしなかった。ただ、姉の初音の関係で、しばらく貴夜の家に住候するとだけ伝えた。

リーゼロッテも特に会話には頓着しないようで、黙々と料理を頼張り続けている。小さく頷き、そして幸せそうな顔をして、姉の作った弁当を平らげていた。

自己紹介さえどうでもいいようで、沙樹や愛莉に対してはほとんど歯牙にかけぬと言った感じであった。

リーゼロッテのそれは、まさに唯我独尊を絵で描いたような態度であった。

なぜか顯人にだけは、リーゼロッテもなんらかの関心を示した。だがそれは友好的なものとは言えず、どこか警戒しているようなものであったが……。

そんな顯人はみんなからすこし離れて、サンドイッチを片手にリーゼロッテを見つめていた。なにかを見極めるように、そして警戒するような冷徹な目で……。

落ち着かない状況で喉が詰まるような食事を終えると、沙樹と愛莉は「先に教室に戻るね」と呟き、そそくさと立ち上がった。

「ああ、わかった　ごめんね」

そんな二人に、申し訳なさそうな声で貴夜は応える。

「あんたが誤ることなんてなにもないよ」

沙樹が肩を竦めて、なかば吐き捨てるようにそう言つと、そのまま背を向けて歩き出した。

愛莉は困った顔で引き攣った笑みを浮かべながら、小さく頭を下げると、沙樹の後を慌てて追って行った。

「なあに、あの娘。なにを怒っているのかしら？」

リーゼロッテは、ポットのお茶を紙コップに注ぎながら呟いた。それでも特に関心を示してはいない。

「それじゃ、俺も行くわ」

頭人がそう言つて手を振った。硬質な笑みを浮かべたまま、屋上の入り口に向かい、歩き出す。貴夜はその背中になにも声を掛けることができなかった。

そして陽光の差している屋上からは、貴夜とリーゼロッテの他には誰もいなくなった。

「あらあら。誰もいなくなつてしまつたわ」

「君がなにかしたんだろ？」

にっこりと笑つたリーゼロッテ瞳の奥に、どこことなく人を落ち着かなくさせる淡い輝きが宿っているのに気づき、貴夜は不信そうな

声で訊ねた。

「まあ、ね。ちょっとだけ魔法を使ったのよ」

その魔法がどう言うものか聞きたくはない。だが……。

「なんでみんなを追い払うようなことをしたのさ？」

その理由だけは聞いておかなければならないと貴夜は思った。

「そうね。あなたが監視されていたからと言う理由じゃだめかしら？」

「監視？ 誰がぼくを監視なんてする必要があるのさ？」

「さあね。でも、あなたの親しい人間が危険に巻き込まれても嫌でしょ？ なんて言っても、あなたは『オーガ』に狙われているのだから」

リーゼロッテの言葉に、忘れていた現実を思い出した貴夜は、陰鬱な顔で「ああ、そうか……」と呟きを漏らした。

「それじゃあ、わざとぼくの周りから人を遠ざけたんだね？」

貴夜がそう訊くと、リーゼロッテは曖昧な表情で「そ、そうよ」と答える。

なんとなくその態度に引つ掛かるものを覚えたが、貴夜は取りあえずそれで納得することにした。

「それにしても 便利な魔法なんだね。どうやってそんなことができるんだ？」

本当に便利な魔法だと思っていた。もしそんな魔法が自分にも使えるのなら、ぜひ教えを乞いたいとも思う。

そうすれば、煩わしい人間から逃れられるだろうから……。

「あら、興味があるの？」

リーゼロッテはなにか企んでいるような顔で笑う。そして貴夜の顔を覗き込むようにして、その綺麗な自分の顔を近づけて来た。

冬の海のように深い青の瞳と、夕暮れを間近にした空のような紫色の瞳。そのあまりの深さに、妖しい輝きに、貴夜は思わず魅入ってしまった。

まるで宝石や、夜空の星のように輝くその瞳は、貴夜が目にした中でもっとも美しく、そして魅力的な瞳であった。

そんな瞳で見つめられれば、誰もが彼女の虜になってしまうだろう。

「 やっぱりあなたにはあまり効果がないのね」

リーゼロッテは唇を突き出し、すこし膨れたような顔をした。

「はあ？ なんだい、効果ってのは？」

「あなたが訊いた魔法のことよ。もっとも魔法ではないんだけどね。」

でも、さすがは『主^{ロード}』の力を宿しているだけあるわね」

リーゼロツテどこか残念そうに、それでいて喜びの笑みを見せた。

「どう言う意味さ？　ぼくに魔法を掛けたって言うのかい？」

「そうよ。そんなのわかっているでしょ。もう、本当にあなたは鈍いわね」

「鈍いつてなんだよ。そんなのぼくにわかるわけないだろう？　だいたい、『主^{ロード}』だとか言われても、ぼくにはそんな自覚なんてないんだ」

リーゼロツテの人をバカにしたような態度に、貴夜はすこしムツとした。

「だって本当に鈍いじゃない。わたしが最大限の『魅了』を、『魔眼』の力を思い切り使ったのに、タカヤはわたしに見惚れないし、ぜんぜん優しくもないもの」

リーゼロツテは膨れてぷいと横を向いた。

「『魔眼』？　それに『魅了』だって？」

胡乱な目で見つめる貴夜に、

「そうよ。わたし達『闇の種族』の能力に、『魔眼』の力はつき物なのよ。いくらあなたが同胞とは言え、わたしの『魅了』にちっとも気づかないんですもの。わたしのプライドはズタズタよ！」

と、拗ねたような怒りをリーゼロッテはぶつけてきた。

貴夜はそんなリーゼロッテの顔をまじまじと見つめ、「なんでそんなことを……」と呆然と呟いた。

「だって、あなたが知りたいって言ったんじゃないの！」

そう答えるリーゼロッテは、小憎らしくも愛らしい少女だった。すくなくとも貴夜には、『闇の主』などと言う剣呑な存在には思えなかった。

だがそんな気持ちこそが、貴夜から現実存在する暗黒の危機を、認識させる機会を失わせていたのだった。

「まったく……。いったい何者なのよ、あの女は！」

苛立ちも顕わにした沙樹は、周囲の人間の目を気にすることなく荒らしく罵った。激しく首を振ったので、ポニーテールの赤い髪が愛莉の頬に当たった。

「落ち着いてよ沙樹ちゃん。桐生君にだって事情があるのでしょう？」

愛莉は宥めるようにして沙樹の肩に手を掛ける。だがその唇は、色が白くなるほどに噛み締められていた。

（あの子はなんなの？ どうしてわたし達の間割り込んで来たの

？)

愛莉自身がそう叫びたかった。

もしあの娘があれほどまでに可憐で、美しい少女でなければ、ここまで沙樹も苛立つこともなく、そして愛莉も苦しさを覚えはしなかっただろう。

「あいつの顔を見た？　まるで、あたしらなんかそこに居ないと言うように、完全に無視していたじゃないか。わざとらしく貴夜にべったりして、しかもあたしのことを睨んでいたわ！」

憤懣やるかたないと言った態度で、沙樹は罵り続けている。

愛莉にも沙樹の気持ちは理解できていた。

でも、愛莉にとっては沙樹さえも贅沢なことを言っているのだと思っ。

沙樹だっていつも貴夜と仲良く過ごしているではないか。

他の誰より　　神代顕人を除き　　貴夜の傍に居場所がある
ではないか。

わたしよりも多く……。

「貴夜も貴夜よね！　いくら美人の前だからって、あんなに鼻の下を伸ばしてさ！」

沙樹の怒声は反対に愛莉を醒めさせていく。

（わかっていくくせに……。沙樹だって本当はわかっているくせに。貴夜君が美人だからって、簡単に心を許すような人じゃないってことを……）

そう言い返したかった。だが。

沙樹は愛莉の親友だった。互いに貴夜に惹かれているオンナであったが、だからこそ二人の絆は深い。

もつとも、沙樹と愛莉の愛情の方向は、微妙に違っているのだが……。

愛莉は自分が選ばれた人間だと認識していた。

貴夜の傍に居ることを許された、限られたメンバーの一人である。

貴夜は一見すると平等な人間だ。だがそれは、誰にも興味を示さず、親愛の情を持たないと言う意味でもあった。

だが、沙樹と顕人だけは別だった。そしていまは愛莉もその仲間入りをしている。

全校の生徒の中で、この三人だけが特別なのだ。

貴夜の人としての心は、あまりにも情が深いためか、あまり多くの人間を愛せない。愛莉は貴夜との親交が深くなった頃、そんな貴夜の愛情の形を知った。

気にしている人間とそうではない人間。

貴夜にはそう言う区別しかない。すくなくとも愛莉にはそうしか思えなかった。

貴夜はまるで少女のように綺麗な男の子で、成績も良く、そして一般的に優しいと思われている。いや、紳士的で穏やかな振る舞いによりそう見えているだけなのだが、貴夜を良く知らなければ気づかないであろう。

実際には、貴夜は誰にも優しいタイプの人間ではない。

だから愛莉は貴夜に好意を持っていた。

普通はそう考えられないだろう。だが愛莉は、誰にも優しい人間など信じられない。それに、なんの見返りもなく人に優しくする人間の存在を信じない。どこか捻くれた考えであるが、そう言った質の少女だった。

貴夜や顕人が異性に人気があると同じく、愛莉もまた男子生徒からアイドル視されている少女であった。つまり貴夜と似た境遇だったのだ。

誰にでも愛想をよく接し、けっして自分の感情を顕わにしない。でも心の中には闇のようなものが巣食っている。

そんな愛莉は、貴夜に同朋意識を持っていた。それが最初……。でもいまは、そんな陰湿な仲間意識よりも、深く貴夜と関わっていたいと言う感情の方が大きくなっていった。

「まさかあの女、貴夜に気があるんじゃないのかしら？」

愛莉が自分の思いに沈んでいると、沙樹がいきなりそう言い出した。

「別に 珍しいことじゃないわ」

ぞんざいにそう応える愛莉に、沙樹は思わず訝しげな視線を向ける。

「だ、だってそうじゃない？ 貴夜君は女の子には好かれ易いですよっっ。」

「まあ、そうだけどね……」

沙樹は苦々しく呟く。だがまだ納得はしていないようだった。

「でも、あんな綺麗な娘が本当にいるのね……」

愛莉がぼんやりと呟くと、沙樹はさらに眉を顰めて溜め息を吐いた。

「別に綺麗だからって言うのはどうでもいいんだけどね……。なんかあの目がどうにも嫌なんだ」

「そうね。わたしもそれは感じたわ。人を小ばかにしたうん、完全に見下したような目だったもの……」

愛莉は胸に込み上げる悪意を飲み下し、平板な声を装う。

「こうなったら、貴夜を取っちめてやらなきゃ気が済まないわ！あの女がなんなのか、はっきりして貰おうじゃないの」

沙樹はやや興奮気味にそう言くと、また屋上に向かおうと歩き出そうとした。愛莉もその後を追おうと踵を返す。

その時だった。いままでどこかに姿を消していた頭人が、険しい表情で駆け寄ってきた。

「中根達が屋上に向かったらしい」

無然とした声でそう呟くと、頭人は階段を駆け上がった。いった。

変容する日常 2

まったく呆れたものだ。

苦い笑みを唇に、ヴィトリーオは目の前に映るその场景を見つめ続けていた。

もし他の同僚が見ていたのなら、あれが『闇の主』にして『七主』の一人、『黄昏に抗う者』リーゼロットだとは俄かには信じられな
いだろう。

ヴィトリーオとて、現実に『主』をこの目で見るのは初めてのこ
とだった。

『旧きもの（エルダー）』とは何度か対峙し、それに打ち勝ってきた。そしてこの地での任務に就いてからもすでに二体の『従者』を屠っている。

だが『主』となると話は別だ。

『教会』からは『主』に対する敵対行動を慎むように言い渡されている。もちろん、彼ら『闇の主』が異端とされていないわけではない。むしろその逆だろう。なんとと言っても、彼らは『闇の種族』に君臨する『君主』なのだから……。

ただ『主』と認定されている敵性生物があまりにも強大なため、単独での戦闘行為を禁止しているだけなのだ。

しかし……。

実際にはよほどの実害がない限り、『教会』が『主』との戦闘を許可することはないだろう。

事実、『教会』の歴史の中で、『主』との戦闘に至った事例はわずか三度だけだった。そして勝利に至ったのはただの一度だけ……。

その戦闘では、百人もの戦闘要員と二十名の魔術師が動員され、完璧な布陣と入念な計画の元に行なわれたものだった。

当初は被害を二割以下に抑えるべく、その計画は立てられた。しかし実行に移ったその後、計画の甘さが徐々に露呈したのだ。

次々に倒れる神の戦士達。血の汚泥に塗れた彼らの遺体は、見るも無残なものだったと伝えられる。

結局はその『主』を屠るには成功した。しかし物的及び人的損害は甚大で、その損耗率は八十パーセントをわずかに超えるものになってしまったのだ。

そんな事例があつて、まともに『主』と戦端を開くことは禁忌とされている。

触らぬ神に祟りなし　そんな諺がこの国にあるのだが、まさか『教会』がこのような指針を立てているとは、末端の戦士であるヴィトーリオにはまったく理解できない。

『闇の種族』と戦うのに、被害や損耗を計算する必要などないのだ。

異端を打ち払うと言う確固たる意思。死をも恐れぬ神の戦士としての覚悟があれば、たとえそれが強大な『闇の主』であろうと、栄光ある神の御名において戦えるのだ。そうでなければならぬとヴィトリーオは考えている。

だからなのだろう。

ヴィトリーオは与えられた任務以外の、そして接触することさえ禁忌とされる相手を、いまだにしつこく監視していた。

本来の目標である『オーガ』を見つけ出してもいないと言つのに……。

二人の『闇の主』の生温い光景に、ヴィトリーオは監視の意味を失い、そろそろ任務の完了を急ごうと決心した。

あのように油断した状態ならば、いつでも『七主』の一柱を封じられるだろう。それはあまりにも容易いように感じていた。

魔術の『眼』を閉じようとした瞬間、ヴィトリーオはそれを思い止まった。

リーゼロッテとあの少年が、二人だけの世界を創っていたその場に、いきなりのように複数の男が現われたのだ。

しかも明らかに敵意と怒りの念を振り撒きながら……。

あの穏やかで温い、『闇の主』の姿とは到底思えないその状況が、新たな人間の登場によって変化するかも知れない。

そう考えたヴィトリオは、神に仕える聖戦士でありながらも、その整った顔に卑俗的な笑みを浮かべた。

「こんな所まで女を連れ込んでんのかよ」

からかうような、それでいて怒りを底に含んだ声が投げかけられた。

貴夜は身を硬くして声のした方に視線を向ける。

声を聞いた瞬間、それが中根であるとはわかっていった。

一方的に貴夜を目の仇にする中根とその一味は、下卑た笑みを浮かべながら近づいてくる。

どこの学校にもこのような生徒はいるのだろうか、一応進学校であるこの学校でも、いわゆる不良と呼ばれる人種は存在する。特に中根は一際目立つ存在だった。

中根は如何にもチンピラと言った格好をしている。つんつんに逆立てた金髪に耳のピアス。刈り込んだ顎鬚と生来の三白眼。どう見ても人の良い人物のそれではない。

いままでにも色々と問題のある行動を起こしているのは、誰もが承知の事実である。

しかも悪いことに、中根は地元の有力者の家系に生まれた男で、教師さえも彼に表立って注意することができない。

どちらかと言えば、貴夜は男子生徒に好かれるタイプではない。それは貴夜にもわかっていた。しかし中根は貴夜の想像を超えた、異常なほど敵意を持って貴夜に絡んでくる人間だった。

たとえ避けようとしても、悪意を持って貴夜に近づいてくる。そんな厄災のような男である。

貴夜は立ち上がると、胡乱そうな眼で中根を見ているリーゼロツテの右手を掴み、「もう行こう」と囁いた。

「なんだよ、俺達が来た途端に逃げるのかよ？」

おどけたような声で、しかしその眼は粘着質な輝きを湛えながら、中根は笑う。

「まあ、いいさ。とっとと行っちまえよ。でもその女は置いていけ」
下卑た笑いが巻き起こった。そしていきなり、中根の腕がリーゼロツテの肩に伸びる。

「なあ、あんだだってこんな臆病者なんかより、俺といた方がいいだろ？」

リーゼロツテの細い肩に、中根の無骨な指が食い込んでいた。だ

がリーゼロッテは苦痛に顔を歪めることもなく、怒りや嫌悪の表情を浮かべることもなく、ただ感情が喪失したような白い顔で、貴夜をじっと見つめている。

それは明らかに、貴夜に助けを求めるような類の視線ではない。

貴夜はリーゼロッテが『魔眼』を使い、中根達を追い払うだろうと思っていた。沙樹や顕人を立ち去らせたように……。

だがリーゼロッテは、ただ貴夜を見つめるだけで、その青と紫の瞳には力を放つ輝きは顕われない。

「おら！ さつさと行けよ！ それともまたボコボコにされたいのかあ？ 本当におまえはマゾみたいな奴だよなあ」

中根の言葉に、周囲の取り巻き連中が大声で笑った。

リーゼロッテは硬い表情のまま中根を一瞥しただけで、肩に置かれたその手を振り払うことさえしない。

「な、なにしてるんだよ？ なんで魔法を　魔眼を使わないんだ？」

貴夜はじれったくなり、リーゼロッテに向かって叫んだ。

「だめよ。わたしはそんなことじゃ気分が晴れないの。このわたしに汚い手を触れた人間に、恐怖と絶望を味合わせてやらなければね」

リーゼロッテの応えは妙に平板で、それが冷酷さを醸し出している。

貴夜は絶句してしまった。

「いいわよ。タカヤはさっさと逃げなさいよ。どうせわたしのために戦う気はないんでしょう？ だったらさっさとあの子達の所へ逃げなさいよ」

リーゼロッテの醒めた声に、貴夜はさらに言葉を失った。

「いいのよ、早く行きなさいよ。わたしを誰だと思っているの？ この男達には下賤な手で触られた贖いをして貰うのだから、気にしないで行っていいわよ。そしてこんな男のこと忘れてしまえばいいわ。あなたが煩うような人間ではないでしょ？」

リーゼロッテの瞳に、妖しい輝きが生まれている。それを見て、貴夜はひどく落ち着かない気分させられる。

「なにをわけのわからんこと言ってるんだよ！」

自分を無視されたと思い、中根は顔をどす黒くして怒りの声を張り上げた。そして力任せにリーゼロッテを引き寄せる。

「どうするんだよ？ いい加減に消えちまえよ」

「ぼ、ぼくがいなくなれば、リーゼロッテをどうする気だ？」

「あん？ てめえには関係ネエだろ？ おまえの代わりにこの女で愉しませてもらうだけだ」

中根は歯を剥き出しにし、威嚇するようせせら笑った。

「まずはこいつを手始めに、おまえにつき合う奴はみんなメチャクチャにしてやるよ。どうもてめえは、自分がどんなに痛めつけられても気にならないマゾ野郎のようだから、おまえが大事にしている奴らを代わりに痛めつけてやる。」

神代はもちろん、飯塚だってな。俺をトコトンバカにした奴らは、みんな痛い目に遭わせてやるよ」

「顕人や沙樹を……？　なぜだ？　あの二人にはなにも関係ないだろ！」

貴夜の目に、暗い怒りが宿る。

「おまえが気に食わねえからに決まってるんだろ。まあ、東條だけは別だ。あいつは俺の女だからな」

品性の欠片も見当たらない、邪悪で淫らな笑みを湛え、中根は薄い唇を歪めた。

「東條……？　どう言う意味だ？」

「あいつはいい女だからな。てめえに誑かされているだけだろうから、俺が調教してやれば、素直に俺のものになるだろうさ」

胸がムカムカする。貴夜は不快感のあまり吐き気さえも覚えていた。

「下らない！　東條がおまえなんかに従うわけないだろ！」

そう叫ぶ貴夜を尻目に、中根はニヤニヤと笑うだけだった。

「まあそう思っているがいいさ。今夜にでも、東條を俺のものにしてやるよ」

中根がふざけた口調でそう言っていると、取り巻き連中にも下卑た笑みが広がって行く。

「品性の欠片もない男ね。暴力や下劣な力で人を従わせようとするなんて」

いままで沈黙を守っていたリーゼロッテが、中根を冷え切った目で見つめた。

「それは どう言う意味なんだ？」

リーゼロッテの言葉の意味に、気づいていながらも貴夜は訊ねる。

「そんなのわかってるでしょ？ この男のような輩は、自分の欲望を薄汚い暴力で満たそうとするわ。昔からそれは変わっていないの」

リーゼロッテは苛立ちを隠そうともせず言い切った。その言葉の意味を考えると、貴夜は激しい怒りに駆られた。

「なんだと！ 正気なのか？」

胸のムカツキが耐えられないほどになった貴夜は、中根に噛み付くように叫んだ。

だが中根は、そんな貴夜を平然とした顔で見つめ、

「はん？ だからなんだよ？ 口先だけの臆病者が、俺になにができるって言うんだ？ 怒ったのか？ 怒ったんならどうするって言うんだ？」

と、嘲笑った。周りの連中もまた、ばか笑いをして貴夜に汚い言葉を投げつける。

貴夜は怒りに震えていた。すでにリーゼロッテの動向など頭から消えていた。中根に捕まっている少女のことなど、怒りのあまり忘れてしまっていたのだ。

頭の中が怒りで一杯になっていた。

憎悪と憤怒の捌け口を求め、異常なほどの暴力衝動が湧き上がっていた。

だがそれは、貴夜にはあり得ないことだった。

「心配するなよ。飽きたらおまえに返してやるからよ！」

最後に投げつけられたその言葉に、貴夜の理性は砕け散った。

抑え難い不快感を振り払うが如く、貴夜は跳躍した。口からは絶叫と言うより雄叫び、怒りの叫び言うよりは鬨の声を張り上げて、卑しい笑みを凍りつかせた中根に飛びかかった。頭の中の冷静な部分は、なにかが貴夜に働きかけてきたのを感じつつも……。

中根を押し倒すとその胸に馬乗りになり、貴夜は握り締めた拳を振り下ろした。

肉が拉げる感覚が拳に伝わる。

骨が砕ける音と、悲鳴のような絶叫、驚きの叫びが耳に入る。

嬉しい……。なんて嬉しいのだろう……。

なにかから開放された清々しい気分のまま、貴夜は拳を振り上げ、降ろし続けた。

中根の取り巻きが呆然とそれを見ている中、リーゼロッテだけは愉しそうな微笑みを浮かべていた。その微笑みは、見る者に戦慄をもたらすような愉悦に歪み、それでいて自嘲するような苦い笑みでもあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2947z/>

『ダーク・ロード 黄昏に抗う者』

2011年12月10日23時57分発行